

こう言って彼は手とわき腹をお見せになった

— ヨハネ「福音書」20,19-29研究 —

Und als er das gesagt hatte, zeigte er ihnen die Hände und seine Seite.

— Eine Studie über Joh 20,19-29 —

(2000年3月31日受理)

佐々木 寛 治

Kanji Sasaki

Key words : ヨハネ「福音書」、トマス物語

はじめに

この小論の構想を確立する最後の局面で、われわれは数週間にわたって、ヨハネの手紙一の冒頭の文言に釘付けにされていた。新共同訳でそれを掲げておこう。

初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見たもの、よく見て、手で触れたものを伝えます。すなわち、命の言について。・・この命は現れました。御父と共にあったが、わたしたちに現れたこの永遠の命を、わたしたちは見て、あなたがたに証しし、伝えるのです。・・

わたしたちが見、また聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたもわたしたちとの交わりを持つようになるためです。わたしたちの交わりは、御父と御子イエス・キリストとの交わりです。わたしたちがこれらのことを書くのは、わたしたちの喜びが満ちあふれるようになるためです。

われわれの思いを辿り巡らせ続け、止むことを許さない論点は、上掲引用文前半と後半にそれぞれ一点ある。それらはわれわれの学びの向かうべき方向を示している。いまは前半だけについて、その方向性の骨格を、いまだ予感にすぎないままにここに記し、われわれの問題意識のありかの一端を表明しておきたい。

上掲引用箇所前半では、現代人がふつう予想する、身体感覚諸器官へと分断された知覚（聴覚・視覚・触覚）が語られているのではない、ということが決定的な核心点であるはずである。われわれには、太古からの始元的で未分化な身体＝精神の活動という視点からの言語活動の理論の構築を、テキストによって強力に督促されているように思われるのである。このような、われわれの目に新しい言語活動の理論。これなしで現代のわれわれが上記「初めからあって」不易かつ＜自然＞にあり続け、そして——本源的に統合された知覚において対象関係を産出して——「現れたもの」、つまり「命の言ホ・ロゴス・テース・ゾーエース」の内容に真に深く参入することは不可能なのではないか。われわれ人間がその中に閉じこめられ、その中で刻々誕生をくり返している、そうした人間の象徴世界の言語。そしてその対極にあるはずの、不易でかつ＜自然＞なもの「現れ」としての「命の言」。上記引用部分では、この両言語がそこから分岐する、その始元こそが語り出されているのではないのか（聖書の「一番初め」の動詞 $\epsilon\lambda\epsilon\gamma\sigma$ は分岐をも表意している）。

それは線分的に表象された時間の始元ではない。語る主体の「真理」を常に取り逃がし隠し続けるしかない象徴言語の活動直下、その最深部で、刻々蠢動しているアルカイックな<自然>＝精神のナイル川、であるはずである。つまりここに語り出されている「初めから」とは、「二つの言語の分岐以前に」ということであるが、それはとりもなおさず、人間の記号生産活動が連続体（イエムスレウ）を分節しつつ感覚諸器官を分離し、正邪善悪の区別を指定し、Gesetztes Wort（われわれの造語。その都度既に予め定め置かれている言葉、律法の世界）を発生させる、その出来事の前に、ということである。このような「分節」なしではおおよそ言語活動なるものはあり得ないように思われるであろう。しかしヨハネ神学がわれわれに推論することを督促し要求し強制している、われわれに新しい言語活動は、正邪善悪の彼岸で情豊かに統合された、身体でもある精神の、アルカイックな活動としてのそれであるに違いないと、われわれは考えるのである。

われわれは言葉を「聞く」だけでなく「見つめ」るし「まさぐり」、「青臭い」とも言う。また言葉を「かき混ぜ」、「噛み砕き」、「味わい」、「呑み込む」とも言う。認知言語学のメタファー理論はこのような身体活動である source domain から「理解する」という概念世界である target domain への写像として、言語活動における身体性と主観的意味論の復権を勝ち取ってきている。source domain の考察は既に無意識の次元にまで鉛を降ろす可能性を秘めていて、われわれはこの志向性は必ず——精神分析運動が適切に参照されるとき——、われわれが並木浩一氏の視覚言語論から学んだ、古代視覚言語活動の身体＝精神一体的飛翔性、身体的現臨性、双方向性、情感性などの論と深く豊かに結び合わされるものと考えられる。

愛の光の中で上記 Gesetztes Wort を<暗い悲惨>として浮かび上がらせている場面を、われわれはヨハネ「福音書」の中に読み取りつつある。第八章の最後から二番目の段落、われわれがいう「絶望の道」の段落がその場である。そこでは（implicit にではあるが）実は、ヨハネ神学による律法批判が原理論的に展開されている。ただしこの「律法批判」は、狭義の宗教的理論としてではなく、むしろ人間存在そのものの条件への深い内面化を施されたうえで、「日常言語活動が孕む地獄性の批判」として遂行されているのである。

Gesetztes Wort の場所ではひとは、人間には不可能であることを知らずして、<自己言及>を行う——【われらの父はアブラハムなり】。ここで語られている「ユダヤ人」とは「父を誇る者」のメタファーである（民族問題がイデオロギー問題に推転されていて、ここでも民族ではなく人間存在そのものの条件への、深い内面化という移行が果たされている）。「誇るべき父」は根源のシニフィアンとなっていて、これに関連したことを誇りつつ口にする者の全ての言動を、無意識のうちに、突き動かし領導する——【諸君は諸君の父の欲望充足を欲している】。「父を誇る者」は父の種子としての自己の、その想像された（可能的）完璧性を誇る。正邪善悪の区別の此岸で自己を正・善の側に立て、それと区別だてされた邪・悪を抑圧する。むしろ邪・悪を生命の底から叩き出す行為によってのみ、つまりはそれを証にしてこそ、ひとは自己の存在理由を得るのである。まさに Gesetztes Wort が生じたその「初めから」、不可能なく自己言及の活動は、血の生贄なしには成立しないのである——【悪魔は初めから人殺しである、彼は真理に根ざさない】。

このようにして Gesetztes Wort という言葉は、始元の、恵まれて円満に融通している人間（父子の交わりのうちに抱きかかえられている存在）の、その丸ごとの存在を根源分割すること（真理に対する Ur-teil、裁き）に発しているのである。だから Gesetztes Wort の場所では語りは、ときに虚偽もあればときに真理もあるという底のものではあり得ないのである——【悪魔は自分に即して語るとき、常に虚偽を語る】。

8章末尾の言語＝律法理論は、以上のように Gesetztes Wort を、丸ごとの人間存在への悲惨な始元的裁きに淵源するものとして、照らし出している。しかしこうした論はとかく抽象的・想像的な形式論理に転落する危険性を孕みやすいものである。その危険を免れて、ここには迫真的な説得力が漲っているとわれわれに納得できたのは、この章の末尾と

冒頭とが深く呼応していることが気付かれたときのことである。章末の言語＝律法理論は、章頭の「姦淫の故に石打の刑に処せられようとしている女性」へ向けて、実に熱く限りない愛の眼差しを注ぎ続ける中から語り出されていたのである——テキスト批評の観点から問題視されることの多いこの位置に、われわれも、件の女性のストーリーに関する限りで、二次性を予想する。「彼らの父の権威を流動化させる」というテキスト戦略を堅持しようとする、Gesetztes Wort 成立論の内的論理に忠実であろうとすること、この二点が貫き通されるものとみなしてみよう。そうすれば必然的にわれわれは、(最初期の写本の数々が正視するに耐えないものとして削除したのであろうところの) 元来の原本の物語として、現行テキストよりも遥かに性的に過激な内容を想定せざるをえないのである。たとえばそれは、「夫の子でなく父の子を産んだことが露見した女性に対する群衆の裁き、そしてイエスは女性を責められなかったというもの」であった可能性もありうる。イエスの愛が人間の条件の根幹に突き刺さるものであるという革命性が「教会道徳」によってスキャンダラスなものにとらえられたことであろう。それは、『エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ』が神義論の絶頂として聞かれたときのスキャンダラ性と、奇妙にも通い逢うことになる。

ところで、われわれが様々な機会に指摘してきたように、ヨハネ「福音書」が一見同一にみえるレトリック形式を狭い範囲で反復するとき、そこには必ず日常的言語活動の境界線を(その手前になし向こうに)突破して、新しい次元のランゲージュが躍動しているのである。8章冒頭部、イエスがかがみ込まれ、地面に字を書かれ、そして身を起こされて語られるという極めて印象的な行爲の「反復」は、——サムエル下 12 章のダビデの行爲を参照するとき(そこには「主に愛された者」という名も示されている)——イエスは地面に文字を書かれることによって、Gesetztes Wort の発生する「初め」の現場へと自分を投げ出され、自らを生贄とされ、こうして Gesetztes Wort を破棄され、そして甦られたということではないのか。甦られたイエスの発せられた言葉をわれわれは造語をもって Keigenes Wort と呼び、Gesetztes Wort と対照する。後者は父の名による禁圧に基づく象徴秩序としてのみ成立する。しかし前者はむしろ「父の自己放棄による赦しに基づく交わり」として成立する(クリステヴァは「想像的父」の場を構想するが、われわれはアルカイックに統合されている限りでの知覚を重視し、「声と光の父」の場を立てる)。

伊吹 雄氏の栄光論の核心点とクリステヴァの「愛のディスクール」の論を参照して提示するわれわれの術語 Keigenes Wort は、命題 Jesus sagt kein Eigenes-Wort. に基づき、イエスの自己言及のみが真理であるとの告白の上に成立する。

われわれは小論本論部で、甦りのイエスのわき腹を見る、の「見る」という、アルカイックに統合された知覚の孕んでいる何ものかに考察を集中するだろう。

問題の所在

われわれはヨハネ「福音書」10章、11章に甦りのイエスの圧倒的臨在を読み取ってきた。その奥深い充実に感動してきたわれわれは、ふと「福音書」本体のエンディングに位置する「トマス物語」を想起せざるをえなかった。「要するにこの物語は何だったのか」、このようにして振り返って見たときの裸の「トマス物語」は、上記諸場面に比較して、まことに貧弱なものにしかわれわれには思われなかった。甦りのイエスの臨在の喜びの叙述は、ここでその絶頂を迎えて当然であるにもかかわらず、物語を終結するというこの位置が本来要求するはずの背丈を、「トマス物語」が直接にそなえているようには見えはしなかったのである。

しかし同時に、「見ずして信じる信仰の勧め」をここに受け止める解釈を始め、「疑い深いトマス」の率直で一途な言動をわが身の上に照らし出しつつ、人々はこの物語に重い説得力を感じ取ってきたことも確かであり、われわれもそうなのである。

要するに、語られていると思えるものはそれほどのものとは見えないのに、受け止める感動は異様に深いということ(そこには、「既に知覚されている事象が記憶には確実に書き込まれたが、言葉を得ないが故に、その内容は未だ意識されないでいる」という事態が潜伏してはいないだろうか)。「トマス物語」の提示するこの不可解な謎の解明に一步でも二歩でも近づきたい、これがわれわれの念願となったのである。

問題を定式化しておこう。

テキストが読み手・聞き手・観客(われわれはこれらを今後一括して「受信者」と呼ぶ)に投げかける語用論的效果は、それが受信者の意識の深部に突き刺さるとき、その先端が深ければ深いほど、受信者の自覚的意識面と情感的無意識面との乖離を受信者に感じ取らさずにはおかない。この乖離の感覚を頼りにして受信者が執拗にその注意力をテキスト表面全体に漂わすとき、——「あの感動はここに根差していたのか!」とばかりに——テキストの新しい同位体が発見されるということがありうるのではないか。われわれはそのことをヨハネ「福音書」本体のフィナーレという舞台に、切に期待するのである。

再検討に着手したわれわれを直ちに襲った最初の衝撃は、20,24-29を「トマス物語」として掲げること自体が根本的な誤謬である、という事であった。「トマス物語」を独立させてはならず、20,19-29を必ず一体のもと受け止めなければならないのであった。ヨハネ「福音書」のレトリック構造のひとつの根幹をなす「反復」ということがここにも極めて重大な力を発揮しているのだということ、われわれはこの点を見過ごしていたことに気付かされたわけである。「反復」によって発出している新しい層の言語活動は何なのか、このことがただちに問題となる。

ところでヨハネ 20,19-29はルカ 24,36-43に対応する。後者とそれほど変わらない内容を前者はなぜ「反復」せざるをえなかったのか、と問うこともできる。すると今度は、ルカ神学にとって、ルカ 24,13-48の一体性こそが軽視すべからざるものとして浮かび上がってくる。この範囲は「肉体をもったイエスが甦られた」という事実をどう理解し信ずるか、という極めて重いテーマで一貫している。

ルカ 24,13-35「エマオ物語」のテーマを、甦りのイエスとの最初の邂逅という出来事を共同体に「二人が」報告する、というものとして注視し続けてみよう。するとわれわれには今度はヨハネ「福音書」がその内部で、このテーマを深め暖めて全く新しい次元でこれを叙述していることが気付かれる(後述)。ここには「出会う」、「見る」ということを巡る両神学の位相差が驚くほど鮮明に立ち現れていて、ルカ神学からヨハネ神学への著しい進展が目撃される。ここに窺われる、新約聖書のランゲージュが進展していく方向は、意識のさらに深部へ、つまり統合されたアルカイックな知覚の情動的秘所へ向かってさらに深く、というものだということが明らかとなるはずである。

われわれは小論本論部での考察を開始するにあたって、なによりもまず、ヨハネ神学にとって「甦りのイエスが現在される」ということがどのような叙述のなかへ立ち現れるのかの、そのひとつの典型を確認しておくことにする。ここで上記 *Keignes Wort* を基盤にする、日常言語活動の極北でのその自己否定というべき *Verändernde Rede*、*Unendliche Rede*、*EGOEIMI-Rede*、*Bildrede* の層を目撃しておく。そしてこのわれわれに新しい言語活動ランゲージュの意味産出の根源に、イエスの自己放棄の言葉が立って、この言葉が、新しい愛の身体=精神的共同の言語とモラルが構築される可能根拠であると考えられうることを、素描的に示すことにする。この背景に踏まえて、われわれは上記場面でのルカ福音書、ヨハネ「福音書」のテキストの比較を行う。比較の途中で、ヨハネ「福音書」の物語本体の冒頭章と最終章とが緊密に対応していることの実態を提示することとなる(それはヨハネ共同体を襲ったはずの決定的な危機に関係する)。そのうえでいよいよわれわれは、「イエスのわき腹の穴」を「見る」ということと身体行為を表意するトマスのパロールの関係に注目する。そこにイエスの教す愛が濃的に立ち上がっていく衝撃に驚嘆しつつ、われわれは不可避的にあるテーマを追究して、ヨハネ「福音書」19章、7章、4章へと遡及していくことになる。

第1章 甦りのイエスが現在されるということ

1.1 「聞く」とは「従う」ということ、主体が身体=精神一体のまま、語る者の傍らへと飛翔し、身体的にもこの方に付き従うこと。

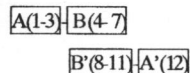
AA

<p>1. 1027 わたしの羊たちは <u>わたしの声を聞き分ける</u>。</p> <p>2. そしてわたしは <u>知っている</u>、彼らを、</p> <p>3. そして <u>彼らは従う</u>、わたしに。</p> <p>4. 1028 <u>そしてわたしは与える、彼らに命を、永遠の。</u></p> <p>5. <u>そして決して彼らは滅びない、永遠に、</u></p> <p>6. <u>そしてだれも奪わないだろう、彼らを、</u></p> <p>7. <u>わたしの手から。</u></p> <p>8. 1029 わたしの父が、 <u>わたしに与えてくださったもの、</u></p> <p>9. <u>[それは] すべてのものより偉大である、</u></p> <p>10. <u>そしてだれも奪うことはできない、</u></p> <p>11. <u>父の手から。</u></p> <p>12. 1030 <u>わたしと父とは一体である。</u></p>	<p>τὰ πρόβατα τὰ ἐμὰ <u>τῆς φωνῆς μου</u> ἀκούουσι,</p> <p>καὶ γινώσκω <u>αὐτὰ</u></p> <p>καὶ ἀκολουθοῦσίν μοι,</p> <p><u>καὶ ἐγὼ δίδωμι αὐτοῖς ζωὴν αἰώνιον</u></p> <p>καὶ οὐ μὴ ἀπόλωνται εἰς τὸν αἰῶνα</p> <p>καὶ οὐχ ἄρπάσει τις αὐτὰ</p> <p>ἐκ τῆς χειρὸς μου.</p> <p>ὁ πατήρ μου <u>ὃ δέδωκεν μοι</u></p> <p>πάντων μεῖζον ἐστίν,</p> <p>καὶ οὐδεὶς δύναται ἄρπάσειν</p> <p>ἐκ τῆς χειρὸς τοῦ πατρὸς.</p> <p><u>ἐγὼ καὶ ὁ πατήρ ἐν ἑσμέν.</u></p>
---	---

1.1.1 意味生産の現場

AAS-11: 父は子に「子の羊たち」を与えられ (639.44)、そのことによってこの羊たちからする子への愛は父の印しを押しつけられ、「父の手」に帰した。子を求める彼らの愛は「父の手」から奪われることは決してない。AA4:7: 子は「子の羊たち」に「永遠の命」を与えられ、そのことによって彼らの命=ゾーエーは子の印しを押しつけられ、「子の手」に帰した。彼らのゾーエーは「子の手」から奪われることは決してない。——父と子がその「手」で飽くまでも守り抜くとされる、驚嘆すべき御心の啓示!

愛における父と子の一体から発する働きの、父と子における眼もくらむような「反復」。それはわれわれのいう「四歩で三段進むトリアーテ」という強い律動形式のリズムをもそなえている (右図参照)。



ここAAでは、日常の言語活動の場所はその向こうに突き抜かれている。殉教によってのち=プシケを奪われた羊たちを愛の共同の内に抱き挙げる、共同体の痛切な典礼的詠唱を座としているかに聞かれるこのテキストは、Keigenes Wortの記号産出の場所、コーラーの律動のうちにある。

クリステヴァにならないコーラーとわれわれが呼ぶこの場所には典型的な徴表がある。頭韻連鎖が頻繁に出現する (AA2-6)。メンタルなエネルギーの流動が昂揚する (AA14 —— ここでは「わたしの羊たち」と「わたし」は各行毎に主格と対格を取り替へあい、双数的ならざる双方向的情愛の律動を高めている)。対比的運動が際立ってくる (AA4-7 vs AAS-11、与える vs 奪う)。同一形式がリビートされる (奪うことはできない、Xの手から)、などなど。ところですでに別の機会に指摘した如く、ここでは一方で《イエス》は τῆς φωνῆς μου / καὶ ἐγὼ γινώσκω / , / καὶ ἐγὼ δίδωμι / , / ζωὴν αἰώνιον / の中に含まれた中位長母音ω (Ω)で象徴され、他方で《イエスに愛された羊たち》は τὰ πρόβατα τὰ ἐμὰ / , αὐτὰ / の中で慈しみをまとって反復される低位短母音α (α)で象徴されている (αとω、阿と咄)。/タ・プロバタ、タ・エマ/ 中でさえも、オ音がア音たちに取り巻かれている。

1.1.2 存在の同型性としての「聞く」、さらに、<身体的>合一としての「聞く」

われわれがくり返し確認してきたごとく、ヨハネ「福音書」においては「聞く」とは受信者の存在そのものが、発信者の存在の振動数に同調して、その倍音として共鳴するという、存在そのものが相互に共振する、ということであった。そして「聞くアクーオー」の音素たちが次ごと「従うアコルーセオー」の中に抱きかかえられていることは (AA13 ἀκούουσι と ἀκολουθοῦσιν)、羊たちが「聞く」とき、彼らの存在そのものがそのままイエスの存在の中に包摂される姿がここに示現しているのであった。

AA1-3を見つめつつ聞き続けるならば、「聞く」とは、聞こえるその声を適度して主体が、語る者の傍らに飛翔し、その場でこれと<身体的に>合一することである、と読み取るべきであると考えられる。逆に「語る」とは、語るその声に主体が乗って、聞く者の傍らに飛翔し、その場でこれと<身体的に>合一することである、と考えられよう。このような次元で、聞く・見る・触れる・嗅ぐ等々の知覚に注目し、それらが身体=精神においてアルカイックに統合された位相における活動を、推論することができよう。

1.1.3 「ギノースコー」の二重性 存在を肯定する存在でありかつ存在を否定する働きである知

このように考えればAA2「ギノースコー知る」とは、統合された身体的双方向的で（エロスのなニュアンスさえもつ）情慮豊かな知覚における合一という、「存在丸ごとの肯定」を現しているだろう（これに対し、否定とは、端的な身体的排除であろう）。しかし「ギノースコー」はたんに諸知覚のアルカイックな統合に過ぎないのではなく、それを超越する次元を含みもっていることがconnotateされている。「与えるディドーミ」(AA4,8)という次元。<羊飼いいエスによってイエスの羊が命（ゾーエー）を与えられる（AAA）>（それはつまり<永遠に父の家に住む者とされる>Vgl. 8,34-36: 14,1-3）ということ。ヨハネのテキストではイエスによるゾーエーの賦与は必ず、イエスその人が自分の羊の「ために」自分のいのち（プシュケー）を「捨てるティセーミ」ことと一体となって語られる。

1.2 父・子・弟子のギノースコーをめぐる語りは必ず、イエスのテーン・プシュケー・ムー・ティセーミ発言で終結する。

1.2.1 「ギノースコー」とイエスの「捨身」

いま10章の構成に関し、その前半V1-21をひとつの緊密なまとまりと見て、これをA「たとえ部V1-6」、B「たとえ解釈部V7-15」、C「たとえ回帰部V16」、D「たとえとその解釈全体の終結の辞V17-18」、E「スキスマ発生V19-21」と分節してみる。このときB項の終結部V15bも、V1-21全体の終結部D項も、イエスの「捨身論」そのものである。こうしてわれわれは10章前半に、<「イエス捨身論」をもって終結するという構造をもつディスクール>という、狭広二つの同位体を見出す。

AA4がテーン・プシュケー・ムー・ティセーミ（わたしのいのちをわたしは捨てる）をconnotateする表現でもあることが確認されるならば、われわれはテキスト上で、ひとつの重大な規則性と出会うことになる。つまり、AA1-3がAA4(V28)によって終結されているように、下記BB2-5はBB6-7(V15b)によって終結されているのであり、こうして、10章の父・子・弟子の存在の同型性を表すギノースコーが語られるテキスト上の線分の末尾には、必ずテーン・プシュケー・ムー・ティセーミ（イエスの「捨身」）が語り出されているのである（10章の他のギノースコーも全て、イエスの捨身を背景に使用されていることをテキストの上に確認されたい）。

これは著しいことである。われわれは9章前半で、イエスの奇跡をめぐって「どうして？」が語られる線分の末尾は必ず「だれ？」の間で終結していたことに注目して重大な知見を得たが、うえの規則性はこの事態と深い対応があるのである。

BB

1. ¹⁰¹⁴ わたしは良い羊飼いである。
 2. そして わたしは知っている、 わたしのもたちを
 3. そして 知っている、わたしを、 わたしのもたちは。
 4. ¹⁰¹⁵ 次のように 知っておられる、わたしを 父が、
 5. そして わたしも知っている、 父を。
 6. そして わたしのいのちを、きくとわたしは捨てる
 7. 羊たちのために。
 8. ¹⁰¹⁶ そしてほかの羊たちもわたしはもっている、
 9. それらはいない、この園に属しては。
 10. そしてそれらをも、わたしは導かなければならない。
 11. そしてわたしの声、それらは聞き分けるであろう。
 12. そして、なるであろう、
 13. ひとつの群、ひとりの羊飼ということが。
 14. ¹⁰¹⁷ 次の理由でわたしを、父は、愛してください。
 15. a わたしは捨てる、わたしのいのちを、
 16. 再び受けるために それを。
 17. ¹⁰¹⁸ b だれも奪い取るのではない、それをわたしから、
 18. そうではなくわたしは捨てる、それを自分から、
 19. 力をわたしは持つ、a' 捨てる [ところの]、それを
 20. そして力をわたしは持つ、再び受ける [ところの]、それを。
 21. この掟をわたしは受けた、わたしの父から」

'Εγώ εἰμι ὁ ποιμὴν ὁ καλὸς
 καὶ γινώσκω τὰ ἐμά
 καὶ γινώσκουσίν με τὰ ἐμά,
 καθὼς γινώσκει με ὁ πατήρ
 καὶ γινώσκω τὸν πατέρα,
 καὶ πρὸς τὸν ποιμῆν μου τίθημι
 ὑπὲρ τῶν προβάτων.
 καὶ ἄλλα πρόβατα ἔχω
 ἃ οὐκ ἔστιν ἐκ τῆς ἀγέλης ταύτης·
 καὶ κείνην δεῖ με ἀγαγεῖν
 καὶ τῆς φωνῆς μου ἀκούσασθαι,
 καὶ γενήσονται
 μία ποιμῆν, εἰς ποιμῆν.
 διὰ τοῦτο με ὁ πατήρ ἀγαπᾷ
 ἅ ὅτι ἐγὼ τίθημι τὴν ψυχὴν μου
 ἵνα πάλιν λάβω αὐτήν·
 ὃς οὐδεὶς αἶρει αὐτήν ἀπ' ἐμοῦ,
 ἀλλ' ἐγὼ τίθημι αὐτήν ὅτι ἐμοῦ τοῦ
 ἐξουσίαν ἔχω ἅ ὅτι αὐτήν
 καὶ ἐξουσίαν ἔχω πάλιν λαβεῖν αὐτήν·
 ταύτην τὴν ἐντολὴν ἔλαβον παρὰ τοῦ πατρὸς μου.
 a-b-a' ヒラリテート

1.2.2 意味生産の現場

ここBBでもわれわれは、Keigenes Wortの記号産出の場、コーラーの律動に触れている。頭韻連鎖（BB2-12）、メンタルなエネルギーの顕著な流動（BB2.5.ここでは「父」-「わたし」-「わたしのものたち」が「わたし」を媒介として推理連結されていて、「わたし」の格は主格対格・対格主格と交替する）、対比的運動（BB2.5、「捨てる」vs「再び受ける」）、同一形式のリビート（捨てる再び受ける、動詞ギノースコー、代名詞アウテーンの連続リビート）などなど。

ガラテヤ49「しかし、（あなた方は）今は神を知っている、いや、むしろ神から知られている」という言葉に溢れる烈しく圧倒する愛は、ひとの心にこの上もなく深い感銘を残すにちがいない。パウロが語る上からのこの愛を、ヨハネは雄渾で律動溢れる形式のうちに表出している。BB1-7がそ

れである。実在との邂逅を表出する際にヨハネテキストは、記号産出の現場に遡源しコーラーの律動を体し、線状性を否定して空間的類像性を強く孕んだランゲージュを發する（ちなみに、BB1-7, 8-13, 14-21は三種の、それぞれが次元を異にするランゲージュを反映しているのであり、われわれはこの順に Unendliche Rede, Bikrede, Unbeständige Rede と呼ぶ）¹。

1.2.3 共同体の礎をなすイエスの「捨身」

ギノースコーで結ばれた「父」－「わたし」－「わたしのものたち」の深く緊密な交わり（BB2-5）。イエスをギノースコーすることによって、「わたしのものたち」（BB2-3）と「父」（BB4-5）とが互いに向き合う（ガラテヤ49!）という、この緊密なつながり。これだけで既に、ひとは息を止め、瞳目緊張して耳を澄ます。直ちに引き続いて（BB6-7）、イエスが遂行されるギノースコーを完成させる言葉、つまりイエスの自己放棄の言葉、「デー・ン・ブシュケーン・ムー・ティセーミ」を、初めて目にし耳にしたときの昔の人々の感動はどれ程のものであったことだろうか。

もう一度テキストの結構を見直して欲しい。ギノースコーによる愛の結合全体（BB2-5）がイエスの捨身（BB6-7）によって支えられている！

ひとの心を驚愕させ、叩きつけるようにして感謝の感動を喚起する、この一方的な自己放棄の愛の恵みの、バトス溢れる事実。ヨハネの共同体が BB1-7 を感謝のうちに歌い続ける情景を、われわれは想像せざるをえないのである。それは聖金曜日を記念して、明るい昼間から日か沈みユダヤの新しい一日が始まるまで、あるいは暗黒の夜から朝日が昇るまで、長時間にわたって繰り返し繰り返し詠じ続けられたのではなかろうか。

さていま、ギノースコーの充満する BB2-7 の線分を、デー・ン・ブシュケーン・ムー・ティセーミの充満する BB14-21 の線分に結びつけて見よう——両者を結びつけるかのようにして継続されている、カ音による頭韻連鎖の異様さを見よ！——この全体の構造そのものがまた BB2-5 と BB6-7 との関係と全く相同的な関係を含んでいるのである。つまり BB2-7 の（否定をすでに含んだ）ギノースコーの線分が、BB14-21 の極限的なデー・ン・ブシュケーン・ムー・ティセーミの線分によって、支えられているのである。小単位 BB2-7 の内部で語り明かされていることが、より大規模な結構のうちで、より強烈な迫力を持って、語り直されているのである。われわれはヨハネの語りに着しいこの語法を、「フラクタル的再説語法」と呼んでいる。

1.2.4 超越するギノースコー 存在から不在への反転

このようなギノースコー、つまりイエスが「自分のものたち」をギノースコーされる、というときの イエスが遂行されるギノースコーは、知覚することと決定的に異なる、超越的次元のものであることが分かる。

イエスがひとに語られ、ひとを見られるとき、そして幸いにしてひとがそのことを見て、聞くことができるとき、イエスは語り見る行為においてひとの傍らにその身体をもつて寄り添われ、他方ひとを身を投げ出して礼拝する（9,38. 10,32 Vgl. 4,28. 18,6.）。しかし、知覚ではなくギノースコーの場合はイエスは、ひとの「傍らに」その身体ソーマを寄り添われる次元を越えて、ひとの「ために」そのいのちブシュケを捨てられるのである！ イエスが遂行されるギノースコーはこのように、「デー・ン・ブシュケーン・ムー・ティセーミ」の言葉と一体のものとなって超越性を帯びるのである。

こうして、イエス捨身のこの言葉が直接的にまもっていたかも知れないところの、（線分的時間のなかの）「将来予告」という外観は、瞬時に崩壊する。いわゆる「福音書形式」のランゲージュは早々と消滅する。地上のイエスの歴史的歩みを時間の推移の中に語り出しているのでは全くないからである。しかし「復活後」という術語を使うとして、このなかの成分「後」が時間の線分性を帯びている限りこれさえふさわしくない。なぜか。

アルカイックに統合された知覚に直接しているかぎりのギノースコーは、対象の丸ごとの存在を包摂し呑み込むこととして、肯定する存在そのものであった。メンタルなエネルギーの双方向的流動の累積（BB2-5）は、まさに愛という存在エネルギーの白熱化であり、それが直ちに存在の無（イエス捨身）に転換する（BB6-7）のである。そしてこの存在の無の語り口は、死へ死へと向かう、『コロソスのオイディプス』に典型的な、Unbeständige Rede の性格を孕んでいる（BB14-21 は Unbeständige Rede そのものであって、言語空間はクラッシュ寸前にまで至っている）。ヨハネのテキストを場にして自らを貫く否定性が、（世界を分節しソーマを抑制する「論理」がそこで展開するという意味での）通常の言語空間の自己否定を強かに促すという、バトスの必然性としてここには出現している。甦りのイエスがおられる、ということ語り明かすランゲージュの進行は、ヨハネのテキストにおいて必然的不可避的に、イエスの不在を語る相面に突入しているのである（おそらく大貫ヨハネ学が開示した「人の子の全時性」はこのバトスの必然性と関連する何かなのであろう）。それは思索のヘラクレイトス的で稠密な経路というべきであり、線分的時間と無関係な次元にある。ここには、伝承された出来事を「復活後」から振り返るという時間性すら介在する隙間はないであろう。

1.2.5 Verändernde Rede と Unendliche Rede

ところで存在の語りか存在の無の語りへと不可避的に滑り落ちていくということだけであるならば、つまり一方の極の語りか（メビウスの帯のように）他方の極へとシームレスに移行するということだけであるならば——双数的＝決定的な二項対立を反映する言語とは区別されるにせよ——、このランゲージュをわれわれは Unendliche Rede とは呼ばない。Keigenes Wort の一部ではあるが、たんに流転を語るにすぎない Verändernde Rede と呼ぶ。

Unendliche Redeにおいては、ランゲージュが存在の極からその否定の極へ移行するのみならずそこから新しい次元の存在へと還帰しなければならず、その新しい次元の存在の意味生産（シニフィアンス）が語用論的に受信者（の無意識）を巻き込み尽くしているのだから。

われわれのテキストにおいて、BB6-7に接した受信者の心がBB2-5を振り返りそこに「新しい存在」を発見したとき、つまりこの心か今まで抱擁していた「存在」がたんにそのたとえでしかないような「真の、ないし別の、ないし新しい recht/odder/ander/odder/new」（ルター『キリストの聖餐について』）、始元を破壊し自分もそこで破壊されるような、「存在」を、爆発する愛の喜びと感謝の内に発見したとき——Unendliche Rede は語り始めたのである。この「新しい存在」はこのようにしてまた「存在の無」に転ずる。この転回転の中では愛が存在であり、かつ存在が愛であり、Egosum cogitans.と同時に Egosum affectus であろう。このような、上からの恵みのパスト的な無限性が出来事となって降ってくるヨハネのランゲージュ（それは分節する「論理」の成立する空間としての言葉の自己否定でもある）を、われわれはUnendliche Rede と呼ぶのである。

1.3 「エゴ-エイミ」の言語空間の創出

麩りのイエスがおられる、ということ語り明かすランゲージュの進行は、ヨハネのテキストにおいて必然的不可避的に、イエスの不在を語る相面に突入せざるをえない、のであった。このような特徴をもつわれわれのテキストの実態を、われわれはBBの中に描かれた円環として検証してきた。しかし下記CCの箇所に叙述してあるEGOIMI- Redeこそ「イエスの存在」の語りの起点として、BB14-21の「イエスの不在を語る」Unbeständige Rede である終点へと真に対応し、ここにさらに大きな円環が描かれているのである。CC

<p>1. ¹⁰⁷「はっきり言っておく。 2. わたしが羊[を招き入れる]門である。 3. ¹⁰⁸わたしより前に来た者は皆、盗人であり、強盗である。 4. しかし聞かなかった、彼らに、羊たちは。 5. ¹⁰⁹わたしは門である。 6. わたしを通過してもし誰かが入るならば、その者は教われる。 7. そして出たり入ったりして、牧草を見つける。 8. ¹⁰¹⁰盗人は来はしない、 9. ためでないならば、盗んだり屠ったり滅ぼしたりするため。 10. わたしは来た、 11. ために、命を羊たちが受けるため、 12. しかもあり余るほどのものを彼らが受けるため。 13. ¹⁰¹¹わたしは良い羊飼いである。 14. 良い羊飼いは自分のいのちを捨てる、 15. 羊たちのために。 16. ¹⁰¹²雇い人であって羊飼いでない者、 17. 羊たちが自分のものたちであるのでない者、 18. 彼は狼が来るのを見ると、 19. 羊たちを置き去りにする、そして逃げる。 20. ・・・狼は羊たちを奪う、また追いつく。・・ 21. ¹⁰¹³なぜなら彼は雇い人であり、 22. だから彼には羊たちのことが問題なのではないからだ。</p>	<p>‘Αμὴν ἀμὴν λέγω ὑμῖν ὅτι ἐγὼ εἰμι ἡ θύρα τῶν προβάτων. πάντες ὅσοι ἦλθον (πρὸ ἐμοῦ) κλέπτει εἶσιν καὶ λησταί, ὅλλ’ οὐκ ἤκουσαν αὐτῶν τὰ πρόβατα. ἐγὼ εἰμι ἡ θύρα· δι’ ἐμοῦ ἐάν τις εἰσέλθῃ σωθήσεται καὶ εἰσελεύσεται καὶ ἐξελεύσεται καὶ νομὴν εἰρήσει. ὁ κλέπτης οὐκ ἔρχεται εἰ μὴ ἵνα κλέψῃ καὶ θύσῃ καὶ ἀπολέσῃ· ἐγὼ ἦλθον ἵνα ζωὴν ἔχωσιν καὶ περισσὴν ἔχωσιν. ‘Εγὼ εἰμι ὁ ποιμὴν ὁ καλός· ὁ ποιμὴν ὁ καλὸς φημὶ νομῆν αὐτοῦ αἵθημα ὑπὲρ τῶν προβάτων· ὁ μισθωτὸς καὶ οὐκ ὄν ποιμην, οὗ οὐκ ἔστιν τὰ πρόβατα ἴδια, θεαρῆι τὸν λύκον ἐρχόμενον καὶ ἀφίησιν τὰ πρόβατα καὶ φεύγει καὶ ὁ λύκος ἀρπάξει αὐτὰ καὶ σκορπίσει ὅτι μισθωτὸς ἐστίν καὶ οὐ μέλει αὐτῷ περὶ τῶν προβάτων.</p>
--	--

1.3.1 10章内部での、イエスの降下来臨—上昇退去

10章内部でさえイエスの降下来臨—上昇退去のテーマは再演されている。すでにBBの中でわれわれはUnendliche Redeが描く円環たちの重なり連なって行く様を目撃したが、それこそイエスの降下上昇の歩みの道筋を進めるエンジンともなるものであったのである。ヨハネ「福音書」の冒頭からイエスの降下来臨は打ち重ねて演じられ、降下の最深部に至るのが6章章末である。ここでイエスは（イエスに信ずる者のごく一部によって「命の言葉」であると告白されて「呑み込まれ」、残り大多数によって「こんなに硬すぎる言葉が置れるか」と言い逆らわれあからさまに吐き捨てられたのであった（精神分析運動では「呑み込む」はもっとも始元的で深い存在肯定を、「吐き出す」はその否定を意味する。この意味活動はか弱い死に体となった、たんなる比喩であるどころか、今日のわれわれの言語活動の底におお強烈に蠢いている。7章からは、イエスの身体を捕まえようとして追い求める敵対者側の活動が初めて表面化する（それは6章でイエスを「信じているつもり」の人々が、イエスの身体＝言葉を食べようとして追い求めていたことに鮮やかに対応している）。

一方で7-8章のイエスは、双数的＝決闘的対立の場に立たれて「ユダヤ人たちは」＝「おのれの父を誇る者たち」に向かい、「君たちはわたしを殺すことを求めているゼーテイテ-メー-アボクテイナイ」と語り、「君たちは神からの者ではない」と宣告される方である（7:19:8,23-24,37,40,43-47）。他方で9-10章のイエスは、われわれがすぐ上でその輝く姿を見てきたように、「わたしのいのちをわたしは捨てるテーン-ブシュケーン-ムー-ティセーミ」と語り、「自分のものたち」の「ために」自分のいのちを捨てることによって、彼らを羊ノースコーされる方である。こうして自分に固有なものEigenesの最後の残滓をも捨て去られて空虚になられたイエスの放たれる語り、Keigenes WortのなかのUnendliche Redeの意味生産過程（に通じるもの）を、われわれはしばしば目撃してきたところである。律法主義を超克した共同体的調和のモラルの、その可能根拠をも、ヨハネ「福音書」は基底的な言語論として開示するのである。翻ってあの対立の激烈化のなかでの8章章末では、始元的に統合された全体としての人間を根源的に分割し殺害す

る、律法の言語＝Gesetztes Wort と、それが構築する日常律法的秩序の<深く暗い悲惨であること>が——死へと責め立てられていたあの女性への限りない愛の光の中で——照らし出され、批判的に浮き彫りにされていたのであった。あの女性への殺害意志がイエスへの殺害意志と全く同一であること³が、(狭義の律法批判としてではなく)日常言語の地獄性の批判として広義の言語論(＝モラル論)として展開されていることは、ヨハネ「福音書」の独自の深さを示すものである。

さて上掲 CC は、Keigenes Wort が地上に降臨してくる相におけるイエスの降下来臨を語るものである。この意味での降下の最底辺は BB 末の強烈な Unbeständige Rede から開始する。ここからイエスの捨身というテーマは前景から退き、新しい前景として浮上する「イエスの故に殺される人たちの死」に寄り添い、これを背後から包むものとなっていく。10 章末のイエスの上昇退去は、こうして、イエスとイエスのものたちとが強く抱き合うように結ばれて挙げられていく過程なのである。

10 章において、終点に出現する イエスとイエスのものたちとが抱き合った姿が、始点の CC にも如実に窺われるのである。

132 イエスの最初の言葉と共同体の最初の言葉

132.1 イエスの最初の言葉

『在りて在る』神。その神からの神、『エゴー・エイミ』と語るロブスは、人間の知覚と合一するためには、「何として」在るかの、その「Abs-Struktur」を告知するのだからなければならない (Vgl. E・ユンゲル『神学的隠喩論の諸テーゼ』)。

Keigenes Wort の相の下に降下来臨されるイエスの第一声は『エゴー・エイミ・ヘー・スラ・トーン・プロバトーン』である。

「スラ、門」とは、イエスのものたちがそこを通って天国に向かう、その<穴、空虚>そのものである。『わたしは在る、空虚である』——イエスの第一声は在と不在が直接に交替する澄明で深い始元、方向 sens だけは鮮明で、そのことよってかろうじて意味 sens は持ちえている言葉ならざる言葉、Unendliche Rede そのもの、Keigenes Wort の根源、である。

テキスト上の直前、「羊の囲い」の比喩説話では、「門」というシニフィアンは三位一体の第一位格としての「父なる神」を表意していた。そこでは「羊飼いは」子であり、「門番」は「聖霊」である(10 章冒頭の比喩説話は 9 章冒頭の奇蹟物語と対応しており、後者でも三位一体の寓喩が出現している)。前者で「父」が「門」とされたのは、イエスのものとして人々を選ばれ、彼らをイエスのもとへと引き寄せられ、彼らを召すために子を派遣されるという、父の権威による愛の行為の動詞概念を物象化した結果である。その権威において「門」は「羊飼ひ」と決定的に異なる。

ところが比喩説話が終わるやつぎの瞬間に、子が自らを「門」と名乗られた。子の第一声は、それが Keigenes Wort である限り、父の場所をそのまま継承するしかないのだ。当然テキストの不具合を指摘する多くの声があがった。しかしそのような声は——一般に詩的言語にみかけられることだが——ヨハネのテキストに特に著しいことは、同一のシニフィアンが反復されているとき、その場でのシニフィエたちは相互に異なっていることを示すことこそ狙われているのだ、ということをおぼえているのである。

CC 冒頭でイエスがご自分の父を「ヘー・スラ・トーン・プロバトーン」と語られたとき、彼の語られたのは、ご自分の「持ち物は徹頭徹尾、人々を召喚する父の働き代行機能のみ(この意味では今後は「門」と「羊飼ひ」の区別立ては無用となる)」であること、「トーン・プロバトーン」という属格は召喚するという動詞概念の対格を示している」ということ、そしてさらに「他の誰でもなくわたしこそが父から派遣されたものである」ということである。そしてさらに、CC3 から判断すれば、イエスの第一声は「わたしが羊を招く門として来たのだ」ということを共示していることがわかる(始元としての抽象的な「在るということ」の言語化は不可能である。認知言語学は日常言語活動の直中で、[ひとが]在るは生まれ[ている]に、生まれるは来るに、来るは降りるに、死ぬは去るに、去るは上がるに、それぞれ写像される、と論じている)。

CC2.4 は『エゴー・エイミ』が神から由来しているということと、その出来事が過去に対して根本的に新しいものであることを語り、CC5.7 は『エゴー・エイミ』が地上で将来に向かって具体的にどう働くのかを語っている。現在終末論として CC5.7 という言語が開く、神へと強く方向付けられた空間とは即ち、地上の具体的な「神の国」である。

さてわれわれと共に Keigenes Wort の意味生産の現場を目撃された読者は、CC 前半のここまでのランゲージュと CC 後半のそれとの間には、(それぞれが『エゴー・エイミ』の現実化であるとはいえ)決定的な位相差が存在することを認められるであろう。

13.2.2 羊飼ひと羊たちとの外的関係

CC8-12 でイエスは(いまはそのように見ておこう)、「わたしは来た エゴー・エールソン」と語られる。そして「わたしが来た」とはどういうことかを、われわれのいう「対極包含語法」、つまり反対側のポールを立てて、それを否定的に包摂した真理として自らを開示される語法で、語られる。反対側のポールには「盗人が来る」が立てられている。CC8-12 の対比では<羊たちの所有領域>が profile されている。「盗人が来る」ということは<羊たちの所有領域>が貧困化することである。これを否定的に見つめてこれを逆方向に超越した彼方(＝この次元を否定的に包摂した彼方)に出現する意味が「エゴー・エールソン」にある。それは<羊たちの所有領域>が新しい超越的次元で豊富化すること(あり余るほどのものを受け取る)ことである。対比される二種の動作主(agent)が立てられることによって被動作主(patient)が動作主の方へ/方から移動するという、この経路の方向の違いが鮮明に対比される。そうすることによって羊たち、そしてイエスの話を聞く者たちの、手元の所有領域の変化に、注意が向かうことになる。そして被動作主の核心となるものはゾーエーであるが、ゾーエーの内容はさしあたりは、対極のソーエ、アボルミから逆方向に推論してみる以外に知られない。羊飼ひと羊たちとの関係は、後者が受領する patient の内容が未だはつきりとは知られないということを含めて、いまなお外的なままに留まっている。

1.3.2.3 羊飼いと羊たちとの内的関係

CC13-22 ではイエスは(と見ておこう)、「わたしは良い羊飼いだ エゴー・エイミ・ホ・ボイメン・ホ・カロス」と語られる。そして「良い羊飼いだ」とはどういう者のことかを、やはり「対極包含語法」で語られる。反対側のポールには「雇い人」＝「羊たちが自分のものであるのではない者」が立つ。CC13-22の対比では＜動作主の心のなかでの、二つのPの上下動＞がprofileされる。二つのPの一方は羊たちプロバタP₁であり、他方は動作主のいちブシューケーP₂である。

対比される二つの小物語の参照点は動作主の心である。CC18-19で危機に直面したtrajector「雇い人」がlandmark「羊たち」を置き去りにしてそこから逃げると語られている。このように語られているとき、この「離反行動」は物理的経路の描写ではなく、語り手(ground)の心的走査(mental scanning)。ここでは「雇い人」が「羊たち」から離れ去っていく様を想い浮かべる語り手の心の視線の動きの記述であることは聞き手に受け容れられる。このmental scanning そのものに、語り手の心的な価値判断が主観化されて包含されていることも聞き手に受け容れられている。こうして語り手の、動作主trajector「雇い人」の行動をめぐる語りながら、聞き手は動作主trajectorの心的態度を見る窓をもつのである。

ところで認知言語学では、起点領域で「物を持ち上げる」ことは標的領域に写像されて「そのものの価値を高く見積もる」と表現できる。そこで、「雇い人」が上の行動を取ったということの語り込まれたメッセージは、「雇い人」の＜心の中でP₁が下に投げ捨てられP₂が一挙に高く持ち上げられ＞て「雇い人」はこのP₂を追い求めて「羊たち」から去っていく、ということである。この反対ポールでの事態を聞き手は想像力において逆方向の超越的次元に推論をする。危機に直面した際、「良い羊飼いだ」にあってはその心の中でP₂が下に投げ捨てられP₁が一挙に高く持ち上げられ、て、「良い羊飼いだ」はこのP₁を追い求めて「羊たち」の中へ深く入っていく、ということ。

「良い羊飼いだ」の反対極にいよいよ反面教師として「雇い人」がこのように立てられることによって、聞き手・羊たちは、語り手・良い羊飼いだに対する内的な信頼関係を一挙に確立する。ご自分のブシューケーを捨てる程までにこのわたしを愛して下さる方のこの約束の言語行為に直面して、CC11で与えて下さるといわれたゾーエーの内容が、羊たちにはおぼろげに理解されるようになる。ゾーエー理解のその入り口には、このような「絶対的にそして愛の親密さのうちに守られてあること」の喜びが湧き上がっている。CC17.22との反照の光の中で、「良い羊飼いだ」＝イエスの、「ご自分のものたち」がどれほど愛され守られているかがひしひしと伝わってくる。

1.3.2.4 動詞一人称単数形が奇妙に僅少なことが異様である

CC8-22の範囲には僅少なたとえ物語が四本並んでいる。たとえの見事さは語り手イエスの手腕を示しているようであるが他方で、たとえ物語の主主人公にイエス自身が立たれるということは共観福音書のたとえ物語と照らして奇妙である。その目で読み直してみると「主人公にイエス自身が立たれている」といっても、CC10-15の範囲でさえ、主語がイエス(わたし)となってしまうべきところがそれを避ける表現となっている。結局動詞の直説法一人称単数形はCC8-22の範囲に二カ所しかないのである。読者は早速、AA、BBの範囲での動詞の直説法一人称単数形のはるかに広範な分布を確認された。

今まで当然視されていたのはまったく別の同位体を、われわれは想定しなければならないようである。

CC8-22の範囲でCC10-15を引き抜いた、前後の枠をなしている語り(イエスの反対側のポールについての語り)は、イエスとは別人の声、として聞こえはしないだろうか。別の語り手のナレーション、演劇のコーラス隊…

むしろすでにわれわれは上で、CC3から「わたしが羊を招く門として来たのだ」と解釈できると述べておいたが(1.3.21後半)、CC10,13は、そのような「解釈」の対象としての「文言」ではないのか。

1.3.2.5 カテキズムの文体ではないのか?

CC8-22全体を語っているのはむしろ、「共同体の解釈意志」そのものではないのか? 共同体の深部に「エゴー・エールソン」、「エゴー・エイミ・ホ・ボイメン・ホ・カロス」という言葉が大切に守られていて、CC8-22はそのカテキズム上の答えではないのか。上の言葉をまず唱え、会衆がその解釈を唱和する(テキストではその順序は変更されている)。そしてこの解釈が共同体のギノースコー、その信仰告白である、というふうにな…。

そのように考えてみれば、「エゴー・エールソン」がすでに「エゴー・エイミ」の動詞を時制的に分け入って解釈したものであるように聞こえる。『在りて在る』神ではなく人の子・イエスが「在る」、「在る」のは「成られた」のであり、「成られた」のは「到来された」のである。そうするとまた、「エゴー・エイミ・ホ・ボイメン・ホ・カロス」そのものが「エゴー・エイミ」の動詞を機能の様態的に解釈したもののよう聞こえる。『在る』という方は人間にはそのままでは理解できないのであり、いわば『在る』という透明体に、その機能と様態という＜試筆で色づけ＞してはじめて、これは視認できるというわけである。

こうしてわれわれは、CC8-22の範囲には「エゴー・エイミ」についての共同体の知ギノースコーを提示する同位体が激然と存在する、ということが出来ると思われる(イエスの第一声CC2-7は、まさにKaigenes Wortとして、共同体の応答するギノースコー、の声CC8-22と抱き合った姿においてはじめて、地上に実を結んだのであろう)。

「エゴー・エイミ」が変奏され累積して語られる最初のここCC10,13でさえ(こここそ)、ランガージュは、「イエスの捨身」(ゾーエーの賦詩CC11;ブシューケーの放棄CC14)へと滑り込んでいることが知られる。共同体の内に「最初の」無限性の円環構造をえた「存在=ギノースコー」が

ここにカテキズムの空間を開きながら語り出されたのであり、これがCC2-7の<門>の無限性と抱き合った姿において、(10章の範圍における)強力な真の始点となり、上掲BB14-21の極限的な「イエスの捨身」のランゲージュを終点とする、最も大きく、最も太い円環が描き出されたのである。

われわれの前に「エゴ・エイミ」の言語空間が張り渡されていく筋道は明らかになってきたと思われる。

イエスが遂行されるギノースコー——つまり「自分のものたち」の「ために」まずイエスがご自身のブシュケーを捨てて空虚となられることによってはじめて彼らを「自分のものたち」であるとギノースコーされる働き——により地上の「神の国」がすでに開始され、そしてこの無条件の愛の自己犠牲に圧倒された共同体が、イエスの犠牲への<応える愛と感謝>で自らの誕生をこの「神の国」のうちにギノースコー。するということ⁹⁹。このようにして、人間の意識に最も抽象的な「エゴ・エイミ」のロゴスが、新しいランゲージュを開始していくのである。このランゲージュと共同のモラル(すでに地上の「神の国」を構築しているモラル)が湧出していく強力な源泉は明らかにイエスの言葉「テーン・ブシュケーン・ムー・ディセーミ」である。この根源となるシニフィアンを根底にして、CCには『エゴ・エイミ』を表意するシニフィアンが4つ (CC2, 5, 10, 13)、横滑りするように並んでいる。われわれは以前は、この横滑りをテキストの断片性としてしか理解できなかった。しかし今は、この「置き換え」の連鎖こそ、ここで始元的な意味生産が進行中であることの最大の徴表であるのであろうと、われわれは考えている。

小論でここまで検討してきたテキスト範囲において出現するギノースコーの働きは以上のように理解出来る。「最初の」共同体のギノースコー。の最も深いありようはこの範囲には語られていない。それは5-10章長大物語の最終最高頂点10, 31-39のなかに「父と子の相互内在の知」として提示されている。10, 38bの奇妙な語法<ὅτι γινώτε καὶ γινώσκετε> その結果、あなたたちは知るに至り、また知り続けるであろう>は、われわれはこれを詩編第82篇(81篇)5aに關係づけて理解する(ヨハ10, 35が詩82, 6の引用であることはよく言われていることである)。

1A 『エゴ・エイミ』なるイエスの降下—上昇の類像的表現を「見る」 (10章冒頭、「羊の囲い」のBildrede)

これまでわれわれが考察してきたことの総体を圧縮して表現するようにして、10章冒頭には「羊の囲い」の比喩説話が語られている。イエスの降下—上昇の道筋は存在—不在の交替のディスクールを内包するものである(以下ギリシア語本文省略)。

DD

¹⁰¹ 「はっきり言っておく。

入らない者、門を通過

羊の囲いに、

そうではなく乗り越えて来る者、ほかの所から

その者は、盗人であり、強盗である。

¹⁰² しかし入る者、門を通過、
彼が羊飼である。

¹⁰³ この者のために門番は聞き、

そして 羊は 彼の聲を聞き 聞く。

そこで 自分の羊を 彼は呼ぶ、名によって

そして連れ出す、彼らを。

¹⁰⁴ 自分の羊をすべて連れ出したとき、

彼らの前を彼は行く。

そこで羊は彼について行く、
知っているからである、その聲を。

¹⁰⁵ ほかの者にはしかし、

決してついて行かず、

彼らから逃げ去る。

知らないからであるほかの者たちの聲を。

¹⁰⁶ イエスは、このたとえを彼らに話されたが、

彼らは分からなかった、何であったか、彼らに話されたことが。

右寄せの上4段、下4段は共同体の「外」を語るコーラス隊であろう。引用箇所中央を見据える目に、まぎれもなく、名で呼んで下されるイエスの声か跳び込んで来るだろう。イエスが入れられるということは即ち退去されるということ。捨身のテーマはここでは直接には語られてはいないけれど。イエスの上昇は「イエスのものたち」を抱きかかえた姿で進んでいく。

語りの末尾——「彼ら」=「ユダヤ人たち」=「おのれの父を誇る者たち」は、「何を言われている分かりません」「聞こえませんでした」と言った、と小声で伝える語り手。

聞き手はここで、一挙に突き抜け弾けていく喜びのうちに、語り手との共犯意識をおぼえるだろう。「彼ら」のこの「否定 Verneinung」は、<わたしは確かに聞いたがそのことを認めたくない>という信号に違いないからである。

第2章 イエスが身体をもって甦られたことを知ること

2.1 やはりルカは「歴史家＝教導者」（出来事を語り導く者）である

2.1.1 「エマオ物語」——外梓の吟味

EE

^{24.12}そして見よ、彼らのうちの二人が、同じ日に、歩いていた
エルサレムから六十スタディオン離れたエマオという村へ向かって、

^{24.14}そして彼らは話し合っていた、互いに、
これらの出来事の一切について。

^{24.15}するとどうだ、彼らが話し合い論じ合っているとき、
イエス御自身が近づいて来て、彼らと一緒に歩き始められたではないか。

^{24.16}しかし、二人の目は妨げられていた、イエスを認めることを。
^{24.17}イエスは彼らに言われた、
「歩きながら、互いにやり取りしているその話は何のことでか」、
二人は立ち止まった、暗い顔をして。

^{4.30}するとどうだ、イエスが二人と一緒に食事の席に着かれたとき、
イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになったではないか。

^{24.31}二人の目が開け、彼らはイエスを認めたが、
その姿は彼らから見えなくなった。

^{24.32}そして二人は言った、互いに、
「わたしたちの心は燃えていたではないか
道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき。」

(行開始の高さが一番左のもの、ならば1—右のものはこの範囲の交錯配列の対応からはずれているので、さしあたり無視されたい)

καὶ αὐτοὶ ὄμιλον πρὸς ἀλλήλους.

περὶ πάντων τῶν συμβεβηκότων τούτων.

καὶ ἐγένετο ἐν τῷ βιβαλεῖν αὐτοὺς καὶ συζητεῖν

καὶ αὐτὸς Ἰησοῦς ἐγγίσσας συνεπορεύετο αὐτοῖς,

οἱ δὲ βόθαλμοι αὐτῶν ἐκρατοῦντο τοῦ μὴ ἐπιγινώσκαι αὐτόν.

καὶ ἐγένετο ἐν τῷ κατακλιθῆναι αὐτὸν μετ' αὐτῶν

λαβὼν τὸν ἄρτον εὐλόγησεν καὶ κλάσας ἐπέδιδου αὐτοῖς;

αὐτῶν δὲ διηνοιχθῆσαν οἱ βόθαλμοι καὶ ἐπέγνωσαν αὐτόν;

καὶ αὐτὸς ἀφαντοῦς ἐγένετο ἀπ' αὐτῶν.

καὶ εἶπαν πρὸς ἀλλήλους.

Οὐχὶ ἡ καρδία ἡμῶν καιομένη ἦν [ἐν ἡμῖν]

ὡς ἐλάλει ἡμῖν ἐν τῇ ὁδῷ, ὡς διήνοιγεν ἡμῖν τὰς γραφάς;

「出来事」の異常性が、この「出来事」をめぐる弟子たちの「論議の盛り上がり」によって flame up されている。「歴史家」ルカは、「出来事」を言葉のなかへ呑み込みみならなければおさまらないかへ見える。むしろルカにとって、<人々の口の上で噂がもちきりであること>が「出来事」の重大性の標識であるかのようなのである (Vgl. V17-18)。上掲外梓からは抜き去られているルカのテキストでは、驚くべきことに、イエスが「身体をもって甦られること」を、甦られたイエスその人がやっさになって——事、ここに及んで、とさえ言おう——説明し直される (ヨハネ「福音書」での告別説教の累積は、このような不自然さの克服と関係していう)。復活顕現物語におけるルカの、解説教育言語の突出は見落とすことができない。

それはとりもおさず、弟子たちの見る聞くという知覚への不信に結びつく。知覚は塞かれるか否かの方向から注目されるにすぎない。他方、「歴史家」として、事件の現場性を構成する「物証を提示する」という喚覚と行動力は、動物的ともいえるほど牙え渡っている。

いずれにせよ、このテキストは、弟子たちの主体的知覚の貧困を前提し、「イエスは身体をもって甦られたのだということ」の確信を弟子たち (ならばに聞き手、読者) に、論証と物証で外部から強力に注入する、という構造をもっている。ひとに対して事外から示され、事に対して言葉外から付加される。このような特徴点は、ヨハネのテキストとの対照を考えると、重大である。

なお、「パン裂き」という共同体の根源事象が物証として出来するまでは、二人はイエスの姿も声も「認める」ことができなかった、ということが、「目が妨げられていた」ことの内容である。視覚聴覚は統合したものとして語られていることに注目しよう。

それと関連して、われわれにとって非常に重要と思われることは、最後の二行に記述してある二人の述懐である。

「パン裂き」という出来事によって甦りのイエスとの遭遇が達成されて初めて、それより前に実は「イエスの言葉と自分たちの存

在とが共振していたこと」が想起され事後的に意識され得た（『～ではなかったか』の言語表現）ということ。意識と無意識、想起（Erinnerung）と記憶（Gedächtnis）の関連。「イエスのパロール」はイエスがはじめに二人に「近づかれ」たときに始まり、イエスの姿が二人に「見えなくなった」時点で「句読点が与えられた」。この句読点の場ではじめて、先行するシニフィアンたちの連鎖は、「心を燃え立たせる」意味生産を過及的に迎え得たのだということ。このような次第が生き生きと語り出されている（イエスが見えなくなったとき、パロールが終結して意味生産が隆起する。この構造は、仲間の報知に接したトマスの心に、何かを産み落とした）。

2.1.2 「エマオ物語」——ヨハネテキストとの対照にむけてさらに確認しておきたい事項

FF

^{24:25} そこで、イエスは彼らに言われた。

「ああ、物分かりが悪く、預言者たちの言ったことすべてを信じるのに心が鈍い者たち、

^{24:26} メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」

^{24:27} そして、モーセとすべての預言者から始めて、
御自分についてのことを聖書全体にわたり説明された。

καὶ ἀρχόμενος ἀπὸ Μωϋσέως καὶ ἀπὸ πάντων τῶν προφητῶν
διερμήνευσεν αὐτοῖς ἐν πάσαις ταῖς γραφαῖς τὰ περὶ ἑαυτοῦ.

^{24:28} 一行は目指す村に近づいたが、イエスはなおも先へ行くこととされる様子だった。

^{24:29} そこで二人は彼を無理に引き止めた、こう言って、

「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、
もう日も傾いていますから。」

そこでイエスは共に泊まるため家に入られた。

καὶ παρεβιάσαντο αὐτὸν λέγοντες,

Μεῖνον μεθ' ἡμῶν, ὅτι πρὸς ἑσπέραν ἐστίν
καὶ κέκλικεν ἡ ἡμέρα.

καὶ ἐπιβῆθεν τοῦ μεῖναι σὺν αὐτοῖς

^{24:30} するかどうか、イエスが二人と一緒に食事の席に着かれたとき、

イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになったのではないか。

^{24:31} そのとき二人の目が開け、彼らはイエスを認めたが、その姿はかれらから見えなくなった。

^{24:35} 二人も、道で起こったことや、パンを裂いてくださったときに

自分たちにイエスが知れた次第を話した。

Vgl. ^{24:44} そしてイエスは彼らに言われた。

「これらが、まだあなたがと一緒にいたころ、わたしがあなたがたに言っておいたわたしの言葉である。

つまり、わたしについてモーセの律法と預言者と詩編に書いてある事柄は、すべて必ず実現されなければならない。」

ὅτι δεῖ πληρωθῆναι πάντα τὰ γεγραμμένα ἐν τῷ νόμῳ Μωϋσέως καὶ τοῖς προφήταις καὶ ψαλμοῖς περὶ ἐμοῦ.

「引き止めた」のは弟子が「自分たちのところへ」、ということであり、自分たちのところで客人の「誰であるか」がわかったのである。あわせて

「モーセと預言者」（Vgl. ルカ 16,29-31）の特微的な結合に目を留めておいて頂きたい。

それではいよいよ、上掲 EE と FF を下記 GG（ヨハネ 1,35-45）と比較することにしよう。

2.2 <解説教育言語による支配>を反転させるヨハネ「福音書」のランゲージュ

2.2.1 「エマオ物語」を明確に踏まえたヨハネ「福音書」の「弟子召命物語」

われわれがテキストを詳しく引用提示するのは、ヨハネの「弟子召命物語」がルカの「エマオ物語」を明確に踏まえていて、前者による後者の<価値転倒的>解釈に新約聖書のランゲージュの著しい進展があるのだということ、小論読者に目撃して頂きたいと切望するからに他ならない。この焦点は、「事」に「言葉」を接続しようとするルカの強力な志向性を、新しい次元で継承発展させようとするヨハネの深遠崇高な取組そのものである。下記 GG のごく微細な線分に至るまで、上掲 EE—FF との白熱した対比を打ち広げる詩的制作的活動のうちに、語り出されていることに気付かれるならば、そこに信じられないほどまでに新鮮で深い意味産出が発生していることが歴然とすることとわれわれは考える。

GG

^{1:38} その翌日、また、ヨハネは彼の弟子たちの二人と一緒に立っていた。

^{1:38} そして、歩いておられるイエスを見つめて言う、「見よ、神の小羊だ。」

^{1:37} そこで二人の弟子は彼がそう言うのを聞いて、イエスに従った。

^{1:38} イエスは振り返り、彼らに従って来るのを見て、彼らに言う
「何を求めているのか。」

そこで彼らが言った、

「ラビ——翻訳されて『先生』といわれる——
どこに泊まっておられるのですか、」

^{1:39} イエスは彼らに言う、
「来なさい。そうすれば分かる。」

そこで、彼らについて行って、どこにイエスが泊まっておられるかを見た。

そしてその日は、イエスのもとに泊まった。

午後四時ごろのことである。

^{1:40}シモン・ペトロの兄弟アンデレであった、

ヨハネの言葉を聞いて、イエスに従った二人のうちの一人は。

^{1:41}彼は、まず自分の兄弟シモンに会って彼に言う、

「わたしたちは出会った、メシアに

——翻訳されて『油を注がれた者』である——」。

^{1:42}そして、シモンをイエスのところに連れて行った。

イエスは彼を見つめて言った、

「あなたはヨハネの子シモンであるが、

ケファと呼ばれるがよい——翻訳されて『岩』——」。

^{1:43}その翌日、イエスは、ガリラヤへ行こうとしたときに、

フィリポに出会って彼に言う、

「わたしに従いなさい。」

^{1:44}フィリポは、アンデレとペトロの町、ベトサイダの出身であった。

^{1:45}フィリポはナタナエルに出会って言う。

「モーセが律法に記し、預言者たちも書いている方に

わたしたちは出会った。

それはナザレの人で、ヨセフの子イエスだ。」

Τῆ ἑπαύριον πάλιν εἰστήκει ὁ Ἰωάννης καὶ ἐκ τῶν μαθητῶν αὐτοῦ δύο

καὶ ἐμβλέψας τῷ Ἰησοῦ περιπατοῦντι λέγει, Ἴδε ὁ ἀμνὸς τοῦ θεοῦ.

καὶ ἤκουσαν οἱ δύο μαθηταὶ αὐτοῦ λαλοῦντος καὶ ἠκολούθησαν τῷ Ἰησοῦ.

στραφεὶς δὲ ὁ Ἰησοῦς καὶ θεασάμενος αὐτοὺς ἀκολουθοῦντας λέγει αὐτοῖς,
Τί ζητεῖτε;

οἱ δὲ εἶπαν αὐτῷ,

Ῥαββὶ ὃ λέγεται μεθερμηνεύμενον

Διδάσκαλε, ποῦ μένεις;

λέγει αὐτοῖς,

Ἔρχεσθε καὶ ὄψεσθε.

ἦλθαν οὖν καὶ εἶδαν ποῦ μένει

καὶ παρ' αὐτῷ ἐμειναν τὴν ἡμέραν ἐκείνην·

ώρα ἦν ὡς δεκάτη.

Ἦν Ἀνδρέας ὁ ἀδελφὸς Σίμωνος Πέτρου

εἷς ἐκ τῶν δύο τῶν ἀκουσάντων παρὰ Ἰωάννου καὶ ἀκολουθησάντων αὐτῷ·

εἰρίσκει οὗτος πρῶτον τὸν ἀδελφὸν τὸν ἴδιον Σίμωνα καὶ λέγει αὐτῷ,

Ἐβρήκαμεν τὸν Μεσσίαν

ὃ ἐστὶν μεθερμηνεύμενον Χριστὸς·

ἦγαγεν αὐτὸν πρὸς τὸν Ἰησοῦν.

ἐμβλέψας αὐτῷ ὁ Ἰησοῦς εἶπεν,

Σὺ εἶ Σίμων ὁ υἱὸς Ἰωάννου,

σὺ κληθήσῃ Κηφᾶς ὃ ἐρμηνεύεται Πέτρος.

Τῆ ἑπαύριον ἠθέλησεν ἐξελεθεῖν εἰς τὴν Γαλιλαίαν

καὶ εἰρίσκει Φίλιππον. καὶ λέγει αὐτῷ ὁ Ἰησοῦς,

Ἄκολούθει μοι.

ἦν δὲ ὁ Φίλιππος ἀπὸ Βηθσαϊδά, ἐκ τῆς πόλεως Ἀνδρέου καὶ Πέτρου.

εἰρίσκει Φίλιππος τὸν Ναθαναήλ καὶ λέγει αὐτῷ,

Ὅν ἔγραψεν Μωϋσῆς ἐν τῷ νόμῳ καὶ οἱ προφῆται

εβρήκαμεν,

Ἰησοῦν υἱὸν τοῦ Ἰωσήφ τὸν ἀπὸ Ναζαρέτ.

ヨハネのテキストはルカのテキストに対して、「視力」と「言語」と「先を歩く者」と「新しく生じたもの」についてめざましい脱構築を敢行している。ヨハネのテキストでは、弟子たちは読者からは想像もつかないほどの、深く強力な視力をそなえていて、彼らは「見れば即ち信ずる」という世界を歩んでいる。解説教育言語が登場する隙間は皆無である。むしろ深い沈黙の中で、白熱する視線と視線が交差する場で根源語が初めて生産されているのである。イエスの「来なさい」、「従いなさい」の根源語にヨハネ共同体の根源語『ヘウレークメン、われら今会うことを得たり』が⁴⁴呼応して発生している。小論読者は先刻お気づきのことと思うが、後者の生誕を告げる小形式141と145の強力な反復（救済者の「名」の圧縮と置き換えとしてのそれ）こそは、ここがわれわれのいうコーラーであることを、最も強く表徴するものである。しかも歴史的現在「レゲイ、彼は言う」の鼓動は

まことに強力であり、それが生み出す律動の流れは、慶びのうねりを彼方へ彼方へと伝えて行っている。闇の中で「見る」の光が交錯し、この触れ合った光が生み出した始元的な「音」が、上記太字の斜体字で示した「言葉」である（この根源語に住み着く中位音 /h/, /r/, /q/が印象的である）。

上掲GGをもう一度読んでみよう。洗礼者ヨハネの、「地上を歩まれる」イエスを指し示す太く強力な視線。イエスに突き刺さったこの視線の槍はそのまま「二人の弟子」の身体を引き立て導き、二人は意識を奪われた者のごとくである。振り返られたイエスの視線と二人の視線は向かい合う。双方の視線は表層の意識を突き抜けて、深く相手の底を覗き込む。「何を求めているか」の心底を問いただす声。この言葉と、最初の洗礼者ヨハネの言葉との間は、全くの沈黙。「来なさい」との招きを受けた二人はイエスの泊まられている場所までついていく。

ルカテキストではどうだったか。先を「歩いて」いるのはイエスではなく二人の弟子であり、イエスは影のように後からついて来られる。あそこでは二人は「目を妨げられて」いたのだから、場面を進行させていたのは、沈黙の中で進み行く「視線」ではなく、見えないままに話し合い論じあう「言葉」である。だからイエスの問いは、「何を見ているか」ではなく「何を話しているか」なのだった。そして泊まるようにとの招きを受けたのは二人ではなくイエスの方であり、泊まった場所で弟子たちに生じたのは「ヘウレーカメン」の「言葉」ではなく、出来事を認知する「視力」なのだった。

これだけを取り出しても、ヨハネの面目躍如たる詩的制作用的な脱構築の技量とともに、二つの文書の相関は誰も認めざるを得ないところであろう。

「見る」という視覚言語の不思議な充満。「解説教育言語」を積みかけ、言葉で世界を掴み取ろうとするルカのテキストの空間は丸ごと転倒され、その結果は過激すぎるほどの沈黙。そしてそれが受信者を強制して、了解へ向けて自ら跳躍させあるいは沈み込ませる。意味産出の現場だからだ。

両文書の「日暮れ以降の叙述」ひとつを対比してみればよい。「パン裂き」という物証＝「事」の照射と、完璧な沈黙の暗がり

（われわれはこの沈黙の中に包み隠された謎——二つの根源語「来なさい。そうすれば分かる」と「わたしたちは出会った、メシアに」とをつなぐ原体験が一体どういうものであり得たのか——への問いに、ルカ 24,29-30 が答えの糸口を与えてくれているように思えたことから、両テキストの関連を確信していたに過ぎない）。

イエスの視線、発せられるいくつかの根源語、とりわけヘウレーカメンの響き。さながら地上を歩む旧約の巨大な神がそこをよぎったかのような感じを抱かせるテキストの空間。ヨハネ「福音書」がその物語の冒頭の「弟子召命物語」を、ルカ福音書のフィナーレの一単元「エマオ物語」を丁寧に辿りつつこれを脱構築して語り始めているということ。この凄まじい大胆な敢為についてわれわれはひとつの仮説を立てる——ヨハネ共同体は廻りのイエスとの遭遇に失敗した体験があること、しかし、そのことによってかえってイエスの深い愛を知ったのだということ。ここに<遭遇の失敗>とは、イエス復活を巡る溢れるシニフィアンの乱舞とモラルの既成化という、すぐれて言語＝モラルの枠格に起因するものをわれわれは考えている。

われわれはヨハネ共同体の上に仮設する<遭遇の失敗＝失われたイエスを捜すゼーティンということの主題化>（信仰の滑落、疑惑の群生、救いへの絶望、イエス運動への敵対、そして愛のイエスの「再」発見）を象徴して、「エマオの危機」と呼ぶことにする。

2.2.2 空虚な墓の追体験から信仰の再生を求めるヨハネ共同体、その言語形式を「見る」

空虚な墓——エマオ途上の遭遇——弟子の輪の中央への顕現。ルカによるイエス復活顕現物語の三歩の律動。ヨハネ共同体は、「復活のイエスの噂がもたらしたエルサレム」を背景にする「地方」で、イエスとの遭遇に失敗した。ルカの「空虚な墓」と「弟子の輪の中央への顕現物語」を結ぶ環が切断されたその隙間から、ヨハネ「福音書」は噴出したのだといえるのではないか。乱舞する信仰の言葉が覆い隠す切れ目。この切れ目へと不可避的に滑り込んでいくメンタルスペース、ならびにそこから溢れ出ることを開始した新しいランガージュ。

そうだとすれば、「弟子召命物語」の薄明かりの中で吉兆を告げるように響くあの「ヘウレーカメン」は、<廻りのイエスへの遭遇>を告げるもので「も」あったのであり、むしろ<廻りのイエス>を「探し」、<バラクレートス（呼び求められて傍らへと来臨された方）>としてこの方に出会うことができたことの、「半圓い達の告知する声」であるといえよう。そうであるとおそらく、あの「ヘウレーカメン」はたんなる遭遇の喜びではなく、反逆の大罪体験への絶対的赦しを受けた（後述）諸個人の、<再>遭遇（全く「新しい」赦す神への遭遇）の喜びなのだ、と考えることが許されるのではないか。

上記FF、GGの下線部に注目されたい。「われら今過うことを得たりヘウレーカメン」という言葉が湧き立つ、その場に立たれている方を表意する「名」が、Xと直接に示されるのではなく、わざわざ「Xと翻訳されたもの」、「Xと書かれたもの」という注記によって間接的に示されている。この言語形式は見落とされてはならないとわれわれは考える。ルカではそれは名の由来を教えるものであるが、ヨハネでは従来の空虚なシニフィアンが、自らに対する<絶対的赦しの現在>において啓示された「真の、ないし別の、ないし新しい recht odder ander odder new」内容によって、ブルーローマをえた、ということ語るものであるに違いない。

その内容とは、「穴」、「空虚」、「門」、「ティーン・ブシュケーン・ムー・ティセーミ」に深く関係する根源のシニフィアンである。思弁的無ではなく、父と子の自己放棄（イサク奉獻と深く向かい合い、かつ無条件にそれを超越している）の愛に充満した、測り難く深い深淵。「空虚な墓」にヨハネ共同体が発見したのものについての考察はここでは行わず、「エマオ物語」、「弟子の輪の中央へのイエス顕現」をめぐるルカテキストがヨハネテキストにおいて明確に「反転された」ということへの一層の注視を求めるに止めよう。

ともあれ「イエスの墓が空虚であったこと」はヨハネ共同体にとって、「エマオ途上に廻りのイエスを喪失したこと」そのものに重なることであり、<空虚、深淵の中に何を見たか>として、信仰再生の始動点をなすものであることだけは強調しておきたい。

次に「イエス喪失-失われたイエスを捜す」というテーマについて。上記根源語のひとつ「ティ・ゼーテイテ、何を求めているのか」に関する記述を追跡しておきたい（ちなみにこの言葉はルカ24,17「ティネス・ホイ・ロゴイ」に対応していたのだった）。

JJ

¹³⁸ イエスは振り返り、彼らに従って来るのを見て言われる、

「あなたは方は何を求めているのか(ティ・ゼーテイテ) 彼らが、「ラビ・『先生』」という意味・・

どこに泊まっておられるのですか」と言うと、

¹³⁹ イエスは、「来なさい。そうすれば分かる」と言われた。そこで、彼らについては行って、どこにイエスが泊まっておられるかを見た。そしてその日は、イエスのもとに泊まった。……

¹⁴⁰ ヨハネの言葉を聞いて、イエスに従った二人のうちの一人は、シモン・ペトロの兄弟アンデレであった。

¹⁴¹ 彼は、まず自分の兄弟シモンに会って、「わたしたちはメシア——『油を注がれた者』——という意味——に出会った」と言った。

²⁰¹⁵ イエスは言われた。

「婦人よ、なぜ泣いているのか。

あなたは誰を求めているのか(ティナ・ゼーテイイス)。

マリアは、困りだと思っ言った。「あなたがあの方を選び去ったのなら、

どこに置いたのか教えてください。

わたしが、あの方を引き取ります。」

²⁰¹⁶ イエスが、「マリア」と言われると、彼女は振り返り向いて、ヘブライ語で、「ラボニ」と言った。「先生」という意味である。²⁰¹⁷ イエスは言われた。「わたしにすがりつくのはよしなさい。まだ父のもとへ上っていないのだから。わたしの兄弟たちのところへ行って、こう言いなさい。

『わたしの父であり、あなたがたの父である方、また、わたしの神であり、あなたがたの神である方のところへわたしは上る』と。』

²⁰¹⁸ マグダラのマリアは弟子たちのところへ行って、「わたしは主を見ました」と告げ、また、主から言われたことを伝えた。

↓
降
下
来
臨

その証言

↑
上
昇
退
去

その証言

左枠上段のティ・ゼーテイテは、地上に來臨されたイエスが(洗礼者ヨハネによって人々に紹介されたあと)発せられた「一番最初の言葉」であり、これが、甦りて上昇される前のイエスの「一番最初の言葉」ティナ・ゼーテイイス(右枠上段)にみごとに対応している、われわれは驚いていたのである。しかし今や、左枠のティ・ゼーテイテもまた、「甦りのイエスの最初の言葉」で「も」あることとなったのである。ヨハネ「福音書」で「求める、捜す、ゼーティンする」ことがどれ程重大な根本テーマであるかが、ここに改めて示されたこととなる。いまここではさらに、下記引用箇所KKでの右枠上段の「ティナ・ゼーテイイス」が、左枠と右枠の緊密な対応関係から完全にはぐれて浮き上がっていることに注目されたい。この孤立は、上記JJにおける「ティ・ゼーテイテ」との結合にそなえてのものであることは明らかであろう(同様に、上記JJでの右枠上段の「婦人よなぜ泣いているのか」が、左枠と右枠の対応関係から孤立していることが、下記KKでの対応にそなえてのものであることも納得されよう)。

なお、ヨハネ「福音書」の「中点」7章に書き込まれた、イエスの降下來臨上昇退去の壮大な交錯配列(われわれはそれを「第一組鏡像体」と呼ぶ)は明らかに『アエネーイス』の「中点」第6巻地下界探訪に依拠している(後者はまた『オデュッセイア』の中の12の漂流冒険物語の第7話・地下界探訪に依拠している)。この二つの地下界探訪物語には主人公が父親(母親)を抱きしめようと「三度」努めるが果たさない(Aen. VI,699-702, Ody. XI,204-222)というテーマがある。マグダラのマリアがイエスにすがりつくとうとするが果たさない、ということはそれと関係していよう。そのことをふまえた上で同時に、マリアの「イエスにすがりつく」という身体行為とトマスの「イエスのわき腹に手を入れる」(パローする、突き刺す)という身体行為のパロールが、(愛憎に揺れる)想像的情態性において同一次元のものであることは見逃せない。後述するように、トマスのこの身体行為のパロールの背後には「神を刺し貫いた」大罪の記憶があるのであり、ヨハネ共同体のイエス喪失体験の基盤にはこうした、いわば「ユダの痛切な涙」ともいえるものが推論される。マグダラのマリアの涙はユダの涙と接続している。それはヨハネ「福音書」の元来の受信者の涙でもあろう。マグダラのマリアが(ユダ性を介して)受信者へつながつているという、この意味で、トマスはマグダラのマリアと双子なのであろう。20章のイエスが遣われるのはマリアが最初でありトマスが最後なのである。

KK

²⁰¹³ すると言う、彼女に、彼らは、

「a 婦人よ、なぜ泣いているのか」

彼女は言う、

「b 人々が取り去りました、主を、わたしの。

そしてわたしには分かりません、どこに彼らが置いたか、彼を。」

²⁰¹⁴ これらのことを言った後、彼女は振り返り向いた、彼らを、

a' すると彼女は見る、イエスが立っておられるのを。しかし、彼女には分からなかった、イエスがられるのだとは。

²⁰¹⁵ 言われる、彼女に、イエスは。

「a 婦人よ、なぜ泣いているのか。ティナ・ゼーテイイス。」

彼女は思っ、困りだである、言う、彼に。

b そこのお方、もしあなたが運び去ったのなら、彼を、教えてください、わたしに、どこに置いたのか、彼を。

a' そうすれば彼を、わたしが引き取ります。」

ちなみに、ここでの a-b-a'の律動形式をわれわれは「ヒラリテート」と呼んでいる(立体化学からの術語借用、両手で何かを抱んだ形)。登場人物がイエスの死を深刻に語るとき、ヨハネ「福音書」はこの a-b-a'の律動をむかえるのである。

＜エマオ途上で＞甦りのイエスが現れたヨハネ共同体の原光景。われわれはここに＜バラクレートス呼び求められて傍らに來臨される方＞との遭遇体験の始元を見るのである(イエス公的活動部ではバラクレートスは9章弟子論部に出現する)。

2.3 弟子たちの輪の中央への廻りのイエスの顕現

2.3.1 ルカのテキスト (福音書24,33-53)

LL

A²⁴³³ として、時を移さず出発して、エルサレムに戻ってみると、十一人とその仲間が集まって、²⁴³⁴本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた。
²⁴³⁵二人も、道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第を話した。

B²⁴³⁶ こういうことを話していると、イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、
 「あなたがたに平和があるように」と言われた。
²⁴³⁷彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った。

C²⁴³⁸ そこで、イエスは言われた。「なぜ、うろたえているのか。どうして心に疑いを起こすのか。
²⁴³⁹わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしだ。触ってよく見なさい。亡霊には肉も骨もないが、あなたがたに見え
 るとおりわたしにはそれがある。」
²⁴⁴⁰こう言って、イエスは手と足をお見せになった。

D²⁴⁴¹ 彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっているので、
 イエスは、「ここに何か食べ物があるか」と言われた。
²⁴⁴²そこで、焼いた魚を一切れ差し出すと、²⁴⁴³イエスはそれを取って、彼らの前で食べられた。

E²⁴⁴⁴ イエスは言われた。
 「わたしについてモーセの律法と預言者の書と詩編に書いてある事柄は、必ずすべて実現する。
 これこそ、まだあなたがたと一緒にいたころ、言っておいたことである。」

D'²⁴⁴⁵ そしてイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心の目を開いて、
²⁴⁴⁶言われた。「次のように書いてある。『メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。
²⁴⁴⁷また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。』と。

C'²⁴⁴⁸ エルサレムから始めて、²⁴⁴⁹あなたがたはこれらのことの証人となる。
²⁴⁵⁰わたしは、父が約束されたものをあなたがたに送る。
 高い所からの力に覆われるまでは、都にとどまっていなさい。」

B'²⁴⁵⁰ イエスは、そこから彼らをベタニアの辺りまで連れて行き、手を上げて祝福された。
²⁴⁵¹そして、祝福しながら彼らを離れ、天に上げられた。

A'²⁴⁵² 彼らはイエスを伏し拝んだ後、大喜びでエルサレムに残り、
²⁴⁵³絶えず神殿の境内にいて、神をほめたたえていた。

C,C': 見たことを疑うことなく 疑いなく
D,D': 視力、知力の前の 実証、論証

「エマオ物語」同様、この單元にも「見ること (の機能安定性) への不信と、物証・論証を外部注入しようとの強引さ」が認められるだろう。ここには「言葉」の段階と「事」の段階との不思議な交替がある。段階Aの「語らい」の信憑性が希薄であるとみなされ、更に強くイエス到来を「実証する」ものが段階Bなのである。信じない弟子たちにイエスは語りかけられかつ実証として「手と足」を見せられる段階C(イエスの手足の穴に、痛みを以て、言及できるとは)。同様のことが「魚を食べる」ということに關して進行する段階D。事態の推移をよく見ればこの「言葉」と「事」のスパイラルは、イエスの受難と復活の必然性、「必ずデイ」そうなるべきであるとの、その「デイ」を「語り出す」(段階E) ためだったのである! ルカでは「事」は最初の曖昧な「言葉」を破棄するための手段であり、かつ、最終の「必ずデイ」起こるはずの真理を告げる「言葉」を導くための、不可欠な前提なのである。イエスの語り前半は<弟子たちの不信と惑乱への配慮>であり後半は<将来への予告>であり、両者は鮮明に区別されている。

前半の段階Aから段階Eへの推移を熟視されたい。ここではイエスがご自分の<身体に刻まれた穴>を「お見せ」になったのは、「肉体をもつてのイエスの顕現に対する弟子たちの不信をぬぐい去るための窮余の手段」、「必ずデイを語り出すための手段」となっている。つまりルカの叙述は、「身体をもつてのイエスの廻り」の実証を強めようとの意図に迫られて、知覚の情感性を置き去りにするに至っている。「歴史家=教導家のディスコース」はその外在性の極にまでできてしまった(日常言語の「論理」はソーマを抑制する)。新約聖書の言語大陸は「必ずデイを語り尽くそうとする最大の努力」という傾斜の反転を迎える。新しい地殻変動が生ずる。

2.3.2 両テキストの対照 (以下mmをアラビア数字として、Jnnはヨハネ20章の節番号を、Lnnはルカ24章のそれを表記するものとする)

次頁対照表の「なお、しかし、彼らの不信の故に、喜びのあまりの、そして惑乱の故に、彼らにイエスは言われた」(L41) という、ルカがほとんど無意識に吐露した情感面がヨハネでは極めて重大なものとなっている。この表現のまとまりがヨハネでは明白に分割されていて、ここに走っている「断層」が、「地核変動」の発生を強烈に証示しているのである。ちなみに上掲ルカテキストLLでは、イエスの言葉は前半がXX<弟子たちの不信と惑乱への配慮>であり後半がYY<将来への予告>であった。ヨハネはL41から「(喜びのあまりの) 不信と惑乱」の部分抜き出し、ルカでは前方にあったXXと結合して後ろへ回し「トマス物語」を形成する(L39とJ27の対応)。他方ヨハネは「喜びのあまり」をL40と単純に結合し、「イエスは手と足をお見せになった、彼らはそれを見て喜んだ」という形一括して、これを出来事の最初へと(ルカでは弟子の不信の後)転送する(J20)。そしてこのときルカの後方に位置していたYYを現在直下での終末の始動へと組み替えて、これも前へと転送する(L49をJ22へ、L47-48をJ21,23へ)。

ヨハネではL41の表現の中で、弟子たちの情感(彼らが喜んだこと、信じられず思い感ったこと) そのものに焦点が当てられているのである。<イエスの身体に刻まれた穴>を「見る」ときの情感が焦点になるとき、「手と足」は「手とわき腹」に転換される。

四角枠、網掛け、下線部はおよそ水平に、太字斜字体は斜めに、左右対照された

20:19 その日、すなわち週の初めの日の夕方、

弟子たちはユダヤ人を恐れて、
自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。

そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、
「あなたがたに平和があるように」と言われた。

20:20 そう言って、手とわき腹とをお見せになった。

και τοῦτο εἶπὼν ἔδειξεν τὰς χεῖρας καὶ τὴν πλευρὰν αὐτοῖς.
弟子たちは、主を見て喜んだ。

εὐχάρησαν οὖν οἱ μαθηταὶ ἰδόντες τὸν κύριον.

20:21 イエスは重ねて言われた。

「あなたがたに平和があるように。
父がわたしをお遣わしになったように、
わたしもあなたがたを遣わす。」

20:22 そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言わ
れた。「聖霊を受けなさい。」

20:23 だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪
は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さな
ければ、赦されないうまま残る。」

20:24 十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、
イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。

20:25 そこで、ほかの弟子たちが、

「わたしらは主を見た」と言うど、

トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れ
てみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、
わたしは決して信じない。」

20:26 さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、
トマスと一緒にいた。

戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、
「あなたがたに平和があるように」と言われた。

20:27 それから、トマスに言われた。

「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見な
さい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき
腹に入れなさい。」

Φέρε τὸν δάκτυλόν σου ὅδε καὶ ἴδε τὰς
χεῖράς μου, καὶ φέρε τὴν χεῖρά σου καὶ βάλε
εἰς τὴν πλευρὰν μου,
信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」

καὶ μὴ γίνου ἀπιστός ἀλλὰ πιστός

20:28 トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」
と云った。

20:29 イエスはトマスに言われた。

「わたしを見たから信じたのか。
見ないのに信じる人は、幸いである。」

20:30 このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさ
したが、それはこの書物に書かれていない。

20:31 これらのことが書かれたのは、

あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、
また、信じてイエスの名により命を受けるためである。

24:33 そして、時を移さず出発して、エルサレムに戻って
みると、十一人とその仲間が集まって、

24:34 本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた。

24:35 二人も、道で起こったことや、パンを裂いてくださ
ったときにイエスだと分かった次第を話した。

24:36 こういうことを話していると、イエス御自身が彼ら
の真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と
言われた。

24:45 そしてイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心の
目を開いて、^{24:45}言われた。

「次のように書いてある。『メシアは苦しみを受け、三
日目に死者の中から復活する。』^{24:47}また、罪の赦しを得
させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に
宣べ伝えられる』と。エルサレムから始めて、^{24:48}『あな
たがたはこれらのことの証人となる。』

24:49 わたしは、父が約束されたものをあなたがたに送る。

高い所からの力に覆われるまでは、都にとどまってい
なさい。」

24:37 彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った。

24:38 そこで、イエスは言われた。「なぜ、うろたえている
のか。どうして心に疑いを起こすのか。

24:39 わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしだ。触
ってよく見なさい。」

ἴδετε τὰς χεῖράς μου καὶ τοὺς πόδας μου ὅτι ἐγὼ
εἰμι αὐτός· ἠπλάγησάτε με καὶ ἴδετε,
亡霊には肉も骨もないが、あなたがたに見えるとおりに
わたしにはそれがある。」

24:40 こう言って、イエスは手と足をお見せになった。

καὶ τοῦτο εἶπὼν ἔδειξεν αὐτοῖς τὰς χεῖρας καὶ τοὺς
πόδας

24:41 彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がって
いるので、

ἐπι δε ἀπιστοῦντων αὐτῶν ἀπὸ τῆς χαρᾶς καὶ
θαυμαζόντων

イエスは、「ここに何か食べ物があるか」と言われた。

24:42 そこで、焼いた魚を一切れ差し出すと、^{24:43}イエスは
それを取って、彼らの前で食べられた。

24:44 イエスは言われた。「わたしについてモーセの律法と
預言者の書と詩篇に書いてある事柄は、必ずすべて実現
する。これこそ、まだあなたがたと一緒にいたころ、言
っておいたことである。」

24:50 イエスは、そこから彼らをベタニアの辺りまで連れ
て行き、手を上げて祝福された。^{24:51}そして、祝福しな
がら彼らを離れ、天に上げられた。^{24:52}彼らはイエスを
伏し拝んだ後、大喜びでエルサレムに帰り、^{24:53}絶えず
神殿の境内にいて、神をほめたたえていた。

23.21 「見れば即ち信ずる」の視力——還帰すべき始元の情感豊かさを統合された知覚

おおよそ以上のような編集過程の骨格は否定できないものと考えられる。ヨハネは参考にする文書を、元の姿が容易には判定できないほど巨大なスケールでデフォルメするのが常である。上記対照表を見渡して、この箇所はどこまで、原型とのつながりを見えやすいままにしている例は他にないであろう。特に140の断片と41との結合体をJ20にデフォルメする方式（「疑い惑う」→「主を見て喜ぶ」）は、小論読者もすでに気付かれていますように、「エマオ物語」の「目を妨げられた二人の弟子の確信なき論議」を、「弟子召命物語」の「見れば即ち信ずる弟子のヘウレーカメン」へと脱構築する方式と全く同一なのである。「見れば即ち信ずる」の視力、それはヨハネ共同体が直面する危機を克服して還帰すべき信仰の始元である。その内容は反復される二本の線分、J19-23とJ26-29の往復運動の内部で明らかとなり、新しい次元を得て受信者を引き掲げてくれるであろう。

情感豊かにアルカイックに統合された身体=精神としての人間が、Keigenes Wortの構築する交わりの中に生誕する、という神学の成立——このようにわれわれは、「愛の言語始元論」の角度から、ヨハネ神学の成立を考えようとしてきたのである。もともとルカテキストのイエスの手と足の「穴」が凄惨な刑罰に発するものであり、しかもその刑罰がわれわれのための「テン・ブシュゲン・ムー・ティセーミ」である以上、これを「見る」受信者（弟子たちだけでなく）の肉体的な痛みを基盤に共有する方向にランゲージュは向かうはずのものであろう。＜教育的挙証と解説＞の行為を発動する機会を窺って緊張しているルカテキストは、しかしながらこの方向から逆の極へと向かわざるを得なかった。この「歴史家の緊張」から離れてみれば、それはまことに不自然であるといわざるを得ない。その極からの揺れ戻しとしてヨハネ共同体は、＜イエスの身体に刻まれた穴＞を痛みをもって「見据え」、そこにイエスの愛の流出を感じ取り、それに重ねて＜自分たち一人ひとりの身体の穴＞を「見据え」ざるを得なかった。彼らがそこに見た内容は、反復された線分の、上記始元とは反対側のもの＝「トマス物語」が明らかにする。しかし、その考察の前に見ておくべき事がある。

23.22 ルカのテキストに知覚の情感性が捨棄されているとはいえない

141に対するヨハネとルカとの関わり方の違いを念頭に置いた上で、13741aだけを熟読された。ヨハネのテキストとの対照なしでは、ルカのイエスは弟子の不信と未熟性のみを指摘し、矢継ぎ早に物証・論証を注ぎ込まれていたはずであるが、13741aというスコープ（ラネカー）に読解を集中する限り、心悪い恐れおののく弟子たちへのイエスの深い情愛が際立ってくるだろう（是非とも再読三読のうえ、位相の変化を体験されたい）。認知言語学が「スコープの当て方で意味内容が激変する」として理論化を深めてきている技法を、ヨハネのレトリックは無造作に事も無げに駆使するのである（われわれは拙論『開く』において、ヨハネ10,31-39のディスクールは、そのメンタルスペースを詩編第82篇（81）67節というスコープに据えていることを、感激のうちに指摘した）。ルカのテキストに累積する様々な同位体のうちでこの（教導者の踵の下から顔を覗かせている）情感的な契機にヨハネは積極的に呼応する。

23.23 親覺のテキスト解釈学、隠黙が極めて有効に力をふるう場面である

われわれは拙論『転倒』執筆過程の段階から、ヨハネ「福音書」が提示するテキスト重層性がどこから来るのか、聖書四義説をどのような広がりの中で現代に継承しうるのかの理論化を強制されてきた。エーコトクリステヴァにおいてそれぞれに集大成されたテキスト理論をヨハネ「福音書」解釈のために練り上げることを進めてきた過程で、われわれは親覺の隠黙釈と出会い、その射程の深さを測りかねている。上でわれわれの出会った、ルカテキストの新しい同位体、弟子叱責の教導者の衣の下に出現する、情感溢れる現在終末論のイエスを語り出すテキスト新層は、たんなる恣意的偶然的な思惑によって捏造されたものではない。聖書学のみならず、認知言語学、物語論、テキスト理論、親覺解釈学、そして精神分析運動との交錯する場面で公教的に語り合える要素を備えているはずであるとわれわれは考える。

さて未来終末論として、神とイエスに近づく不可避的な過程のあり方の探求とその提示を焦点にする神学をA、現在終末論として、破れ果てた自己の悲惨は如何なる過程によっても覆うべくもなく、主体の救いはもっぱら神の側からの一方的な愛に包摂されることにのみある、とする神学をBとし、テキスト群は正典ないしこれに準ずる領域のものとする。いま仮に、ある古いテキストTはAを叙述するが、末尾あたりにBと読み取れるディスクールを包含しているとみえるでしょう。テキストTの解釈史の階梯は[1] AにBが付加されている、[2] AとBとが並存している、[3] Aが語られるのはBを示すためである、と進む。階梯[3]についての法然の表現に「Aを廢してBに帰せしめんために而もAを説く」というものがある。時代のコンセンサスとの関連でそのように表現が限定される、と解釈する。階梯[3]の解釈は「廢立ハイリュウ釈」である。階梯[4]ではまず次の点に着目する。つまりAであるテキストTが自説の内部にBともみえるものを提示するにあたって、その首尾一貫性Coherenceを貫徹するためにAそのものの内容に飛躍的進展が生じているということ、ここに着目する（エーコフの同位体論はその系統的整備の努力にもかかわらず、Coherenceへの顧慮に欠けている）。テキストたちが反対極の包摂を目指して相互飛躍する運動を解釈の射程に入れるのである。そこでTの解釈は表の文、頸文に依るならば充実化豊富化されたAであるが、裏返すなら、つまり隠には、あるいは影隠密としては丸ごとBである、とみるのである。隠といい密といいあるいは隠密というとき、われわれはこれらを「奥深い真理（隠すことも含め）」と理解しておこう。頭と區別された影は布から踵の先が、雲間から竜の爪や牙が見え、その「見え」が隠密なる本体を共示している

と見るのである。階梯 [4] が観覧の隠頭釈である。この観点から、階梯 [3] は釈相廃立、釈意隠頭という区分も立てられる。このときテキスト解釈と釈義解釈とが時代の進展の中で融合される面も射程に入ってくる。テキスト重層論を、思想史空間の内部に取り組まれた概念史を解釈する方法をも包含するものとして、展開する可能性も与えられるわけである。

ヨハネ「福音書」との対比の中でルカ福音書がその相貌を変えて(むしろ新約聖書の言語大陸が地殻変動を起こして)、いわば「隠頭釈」としては、情感豊かな現在終末論のイエスが語り出されていると言えるのである。当然ながら頭文としてのL41は、弟子たちの烈しい感情・情感の爆発を前に、なお一層の陶冶と思想的バックボーンを注入することの必要性を認めるのに急なのであって、そこには現在終末論は成立し得ないであろう。

2A ヨハネ「福音書」における「身体の穴からの水」の位置づけ

2A1 「イエスのわき腹」を見る眼差し

さてL41に亀裂が走りここに断層ができた。L41の断片とL40が結びばれてヨハネテキストではそれが出来事の最初に回され

^{19b-20}そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。
そう言って、手とわき腹とお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。

と掲げられた。ところが上記2.3.2.1で確認したごとく、「主を見て喜んだ」ということは、「始元の情感豊かに統合された知覚」の上のみ妥当する事態であってあくまでも理念なのである。無媒介にそこへ到達できるわけではない。ヨハネ共同体にとっては、そこから発出しそこへと還帰すべき始元としての理念。L41の上に「見れば即ち信ずる」世界が新しく隆起した。他方でL41はもともと「見ても聞いても信じられず惑乱に揺れる」世界だった。この断層を生み出す所以の地殻変動はどんなものか。それを推論させるパロールは、上記J19b-20に漂ってはいないだろうか。それはルカテキストを組み替えた、その切れ目に顔を出しているはずである。

さてルカテキストでは弟子たちが信じないのでやむなくイエスは「身体の穴」を「お見せになった」のだった。ヨハネテキストでは最初から「お見せになった」。ここでは「手とわき腹」は「イエスであることの目-じるし」(だから「イエスの名」そのもの)となっている(しかも「印しつけている」のは誰か、と問わざるを得ないほど、全く異様に焼き付く印象が「手とわき腹の穴」から滲み出ている)。それはどういうことか。歌いながら得意げにジャケットの速脱ぎをしてみせる男性シンガーがいるがそのように、「挨拶代わりに」、「手とわき腹」を出されたのか。われわれは「見ること」の情感性に注目しようとしている。少なくとも痛みなしでは「イエスの身体の穴」は見れないはずである。ルカテキストの「検証言語」という刷り込みから解放されなければならないのである。L40-41とJ20とのシニフィアンの同一性に惑わされず、情感性が感受しうる方へと聞き取りをずらしていかなければならない。

上掲ルカテキストLLの交錯配列を見てみよう。このこのB項「イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、言われた」に対応するB'項は「イエスは手を挙げて祝福された。そして祝福しながら彼らを離れ」となっている。するとどうなのか。ヨハネテキストでは、「あなたがたに平和があるように」と言われイエスが手を挙げられたとき、弟子たちには「手とわき腹」が見えた、ということなのか。しかしこれもまた、外的な理由づけに頼る、相変わらずのやせ細った「検証言語」であって、弾ける生命的つながりの一体感を喪失したままである。ヨハネテキストではイエスが「お見せになった」と語られてはいるが、それと同時に(意味産出の現場を包むコーラ-という)無意識の海のほうも同時に「印しつけ、見た」のである、と理解すべきである。「お見せになった」とのシニフィアンを視覚的パフォーマンスと理解するのではなく、聴覚に始まる身体的一体性の視覚的効果と理解すべきである。麩りのイエスの「あなたがたに平和があるように」という言葉に自己放棄「テーン・ブシュエーン・ムー・ティセーミ」の声を聞き取り(すでにルカテキストでは「パン裂き」の出来事にイエスの声を聞いていたのだ!)、聞き取った情感豊かな新約聖書の言語大陸の知覚がイエスのく自己放棄の声という、空虚・穴の痛切な深さの故に「手と足の穴」を「手とわき腹の穴」へと転換し、ここに(イエスご自分から引き受けられた) 瘡の割った穴を肉の痛みのうちに見た、のである。だからもちろん、この知覚による転換は、イエス処刑場面の描写の転換、そのものと一体なのである(転換のこの根源性がそのまま、グノーシスとの闘いの重さと勝利の喜びを告げていよう)。

NN

¹⁹⁻²¹その日は準備の日で、翌日は特別の安息日であったので、ユダヤ人たちは、安息日に遺体を十字架の上に残しておかないために、足を折って取り降ろすように、ピラトに頼みだした。

¹⁹⁻²²そこで、兵士たちが来て、

イエスと一緒に十字架につけられた最初の男と、もう一人の男との足を折った。

¹⁹⁻²³イエスのところに来たが、イエスが既に死んでおられるのを見たεἶδονので、その足は折らなかつた。

¹⁹⁻²⁴しかし、兵士の一人が槍でイエスのわき腹を刺した。ὁλλ' εἰς τῶν στρατιωτῶν λόγιχη αὐτοῦ τὴν πλευρὰν ἐνυξεν, すると、すぐ血と水とが流れ出した。καὶ ἐξῆλθεν ἐκ τούτου αἷμα καὶ ὕδωρ.

¹⁹⁻²⁵それを見撃した者ὁ τερατικῶςが証しており、その証は真実である。その者は、あなたがたにも信じさせるために、自分が真実を語っていることを知っている。

¹⁹⁻²⁶これらのことが起こったのは、

「その骨は一つも砕かれない」という聖書の言葉が実現するためであった。

¹⁹⁻²⁷また、聖書の別の所に、

「彼らは、自分たちの突き刺した者を見る」*Ὁμοῦται εἰς ὃν ἐξεκέντησαν. とも書いてある。

十字架上のイエスのわき腹から「血と水」が噴出するのを「見る」者とは、本来、イエスが自分への愛故に甘受された肉の傷みを自分の肉の上に、耐えられる限度を超えて烈しく、感受する者に他ならないのだ、ということである。その者はイエスの一方的な

愛の奔流が「血と水」となって、自分へ向かって降りかかってくるのを「見る」。「手と足の穴」を「手とわき腹の穴」へと転換すること、それはとりもなおさず、「手と足の穴」の痛みに自分を同一化する者が、(イエスのであって同時に)自己の痛みを「血と水」の中にありありと「見る」のだといえよう。このような「転換」によって、未来終末論的観念を弟子や受信者の外部から注入する方向が、現在終末論的事態進行の中に横たわる弟子や受信者の情感深部へと下降し、そのく内部から発露してゐるもの>を表現する方向へと転換されたのである。この新しい極から振り返れば、ルカが行き着いた極においては、十字架につけられたときの身体の「穴」(図)が「ほらここに残っている」(票)として示され、この因果判断を基盤にイエスのアイデンティティが示されていたことになる(検証言語)。それは生きた時間の根源分割であって、救いの働きを現在から排拒し、継続する努力の彼岸へと遠ざけるものである。弟子たち受信者とイエスとの情感性深部での共振は救いを現在化する。このようにして遂行された転換こそ、ヨハネ神学にとって決定的な重要性をもつものであることが19,35の、測りがたい奥深さを感じさせる不気味なパロールに、如実に現れている。

「目撃した者 ὁ ἑσραφάκος」のその「目」が、ヨハネ神学の言語が発生する根源の場所、新しいランゲージュが噴出する火口である

2A2 トマスのパロールが——トマスに意識されずに——語り出している事情

ヨハネテキストほどに大規模ではないが、ルカテキストにも、「イエスの十字架後」に初めて知られる属性をそなえた一人物を、その属性を既知としたままで「弟子召命物語」に登場させるという叙述が出現している。メンタルスペース理論で言えば⁷、弟子召命物語がスペースMを設定し、親スペースRを「イエスの十字架後」に対応させ、「一人の弟子の名x₁」はR内の個人を設定し(下の例では「鶏鳴に接して慟哭するペテロ」を発信者—受信者の既知の共通フレームとなっているとみなす、その準備を与える)、そのM内の対応物x₂を同定する、という叙述。

^{49,50} これを見たシモン・ペテロは、イエスの足もとにひれ伏した、言うには「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです」。
5.8 ἰδὼν δὲ Σίμων Πέτρος προσέπεσεν τοῖς γόνασιν Ἰησοῦ λέγων, Ἔξελθε ἀπ' ἐμοῦ, ὅτι ἀνὴρ ἀμαρτωλὸς εἰμι, κύριε.

ここで<真理の鏡としてのイエスの存在効果>ともいうべきものに注目しよう。イエスは(究極的には、たんにそこに立たれているというだけの、その事実によって)、イエスに対面する者をして、我とわが身の罪をまざまざと見せしめられ、その身体を叩きつけるように平伏せしめられる(内省による罪の意識化ではなく、絶対他者の光による隠れた罪の照射)。ルカ 5.8のペテロの姿を、いかにもヨハネらしく、ユダの姿の上にデフォルメしたものが下記テキストである(沈黙されているイエス)→「対話の主導者としてのイエス」、「わたしから離れて下さい」→「彼らは後ずさりして」はヨハネの典型的編集手法。

この箇所(スペースM)は上の例以上に強烈に<真理の鏡としてのイエスの存在効果>を示している。これは親スペースRを「イエスの十字架後」に対応させ、「ユダ」をR内に設定し(「犯した罪を前に慟哭するユダ」を発信者—受信者の既知の共通フレームとなっているとみなす、その準備を与える)、そのM内の対応物「イエスを裏切ろうとしていたユダ」を同定する叙述である⁸。

^{18,4} イエスは御自分の身に起こることを何もかも知っておられ、進み出て、彼らに言われる
a 「だれを捜しているのか(ティナ・ゼーテイテ)」。 ^{18,6} 彼らは答えた「ナザレのイエスだ」、
イエスは言われる「わたしである」。 イエスを裏切ろうとしていたユダも彼らと一緒にいた。
^{18,6} b イエスが「わたしである」と言われたとき、 彼らは後ずさりして、地に倒れた。
ὁπῆλθον εἰς τὰ ὀπίσω καὶ ἐπεσαν χαμαί.

^{18,7} そこで、イエスは重ねてお尋ねになった
a 「だれを捜しているのか(ティナ・ゼーテイテ)」、 彼らはそこで言った「ナザレのイエスだ」。
^{18,8} イエスは答えられた。「『わたしである』と言ったではないか。
わたしを捜しているのなら、この人々は去らせなさい。」

上記2.3.2で確認した手続きによるルカテキストの改編として「トマス物語」が形成されたとみるとき、当然ながらここに掲げた二要因が組み込まれている。つまり、<真理の鏡としてのイエスの存在効果>としての、ルカ 8.5のペテロのパロールと身体行為「平伏するプロスビプトー」、およびルカ 8.5を語り出す言語活動の信仰上の深化を示すデフォルメとしての、ヨハネ 18.4-8におけるユダの身体行為「倒れるビプトー」。(この位置にあのティナ・ゼーテイテが出現していることに注目せよ——ヨハネの鏡！)

^{20,24} 十二人の一人でティディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。
^{20,25} そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うとき、
トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、
また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、
わたしは決して信じない。」
b δὲ εἶπεν αὐτοῖς, Ἐάν μὴ ἴδω ἐν ταῖς χερσίν αὐτοῦ τὸν τύπον τῶν ἑλῶν
καὶ βάλω τὸν δάκτυλόν μου εἰς τὸν τύπον τῶν ἑλῶν
καὶ βάλω μου τὴν χεῖρα εἰς τὴν πλευρὰν αὐτοῦ, οὐ μὴ πιστεύσω.

何が、と問わなければならない。一体何がトマスをしてこのように激情的に語らせているのかと。語らせているその当のものは、しかし明らかに、次のような新しい意味生産の途方もなく強力な言語形式の中に、顔を出している。「～でないならば、～でないならば、～でないならば、決して信じない」(Εάν μὴ ~, ~, ~, οὐ μὴ πιστεύσω) という、身体行為の段階のステップを漸増的に踏む、奥深い否定 Verneinung の発語形式。この形式の独特な自律性に注目すれば、次のことを認めないわけにはいかない。つまり、自覚面のトマス(エノンセの主体)は「わたしは信じない」と語るが、まさにそのことによって、無意識面のトマス(エノンシアシ

オンの主体)は、三段階のステップと否定構文という意味生産の形式性を介して、「わたしは信じているが、信じていることをどうしても認める訳にはいかないのだ！」と絶叫しているのである。その次元から事態を眺め回してみよう。おそらくトマスとても、<復活のイエスの顕現>がつかずな噂に過ぎなかった段階には余裕があって、「イエスが来られたならわれわれも抱きつこうではないか」ぐらいのことを、例の調子で、語っていたであろう。しかし、イエスは身近に顕現されて、しかも自分は遇うことができなかった。ほかの弟子たちの「わたしらは主を見た」の言葉は、トマスには<真理の鏡としてのイエスの存在効果>を發揮して、トマスをヒブトの身体行為へと叩き落とさざるをえなかった。指を突き刺し、手を押し込むトマスの身体行為は言葉なしでも成立しえたであろう(自分が遇えなかったのが上からの懲罰的なのではないかと恐怖は気付かれずに意識深部を痛撃しているようだが、意識の少し上層には、むしろ状況への憤怒が漂っている)。ここでトマスは言葉を発している。しかしそれは真実に触れえない、手元の表現を借用した救急のパロールであり、イエス運動の中を行き交う(情感をもたない、事実か否かを検証するだけの)検証言語であった。たんなる検証言語が上のような形式性を得て激情的に語られているというまさにそのことが、真実からの疎隔を証示している。

トマスがどうしても認める訳にはいかない「真実」は、トマスの意識を裏切って、トマス自身のパロールの中に語り出されている。彼は吐露している、「指を釘跡に入れ、手をわき腹に入れる、パロールする」という身体行為を生々しく。この漸増法は「イエスの両手を(射るように)見る」から始まり、「自分の手をイエスのわき腹に入れる」に至っている。後者はすでに、「イエスであることの検証」の次元をはるかに越え、「はらわたを掴み出す」殺気立った勢いをさえもちかねない。検証というディスクールの枠組みを超越するこの勢いの中で、上掲NNの「槍でわき腹を刺す、ヌッソーする」、「突き刺す、エッケンテオーする」が反響してくる。19.37のエッケンテオーはゼカリヤ 12.10の「彼らは、彼ら自らが刺し貫いた者であるわたし(=神)を見つめ」の中の「刺し貫く」(LXXは内容を変えている)に関連する。テキストは関連させる、「意識せずして行うトマスの身体行為」を神を刺し貫くということへ!

自覚面のトマスのパロールは「神殺害」を直接には含意していない。しかしトマスの意識下に記憶されている「神殺害の大罪」はこれを、ヨハネ共同体の根源となる意識である上記「目撃した者 *ὁ μαρτυρῶν*」のその「目」が、まさきと「見据えている」⁹。その視点からトマスのパロールを聞けば、「わたしは神を刺し貫いた、イエスに顔を向けることはできない、イエスの前で載られるのが恐ろしい、廻りのイエスの顕現などはなかったことであって欲しい」との、無意識の告解と恐怖のディスクールが出現する。トマスは自分のパロールを、自覚面では、「果たしてイエスがその身体をもって甦られたのか」という検証のディスクールである意識して発した。しかしそこには同時に、トマスの意識を裏切って、告解と恐怖のディスクールが影のように滲み出ているのである。

しかしこの物語を自撃する全ての者の心はその根底から震撼させるのは次のことである。つまり、甦られたイエスがトマスのパロールをそのままなぞるように「反復」されたとき、ここに出現したのは、神を刺し貫くという<罪とする事実>を、冷峻に指摘する断罪のディスクールである。トマス自身、自分の言葉がそのまま他者の言葉として、しかもイエスの口から「お前は～すると言った、～すると言った」と語られるのを聞く瞬間、意識下に抑えていた「神殺害の大罪」の記憶を紛れもない現実としてありありと想起・内化 Erinnerung させられてしまう。<真理の鏡としてのイエスの存在効果>が、完膚無きまでにトマスを打ちのめす。イエスという真理の鏡は、そこへと入射したトマスの「検証のディスクール」の底へと抑圧されていた真理を、「断罪のディスクール」として単純に、しかし逆らひ逃げることのできない、<目に見え耳に聞こえ手に触れる現れ>として、明々白白と反射しているのである(Vgl. 8.32)そしてあなたたちは知る、真理を、そして真理は自由にする、あなたたちを——前半は入射、後半は反射)。トマスへのこの裁きを取り囲んで自撃するわれわれ一人ひとりに、トマスの苦痛が突き刺さる。われわれの神殺害の心的現実が心に突き刺さる!

しかしただちにテキストは反転して、その場に爆発する驚きと喜びをもたらす。イエスのパロールを終結する愛の結句、「信じない者ではない信じる者になりなさい」によって、つまりこの句読点によって一挙に、断罪のディスクールは語り初めの方向へと高速フィードバックされて意味の組み替えが発生する。「そうか君は～したのか、それから～したのか、そうか」、イエスはトマスのパロールに何をもうかえられなかった、ただ静かにくり返されるだけだったのだ。愛に溢れるイエスの結句のディスクール! 明るみに出された大罪が、出されたその場でそのまま丸ごと、「イエスの肉声の中へと吸い取られてしまう。断罪のディスクールは一挙に裁しのディスクールに変換された。<汝の罪赦されたり>という、イエスの信じ難い救いの御言葉! 『君は神を刺し貫く大罪に苦しむ、しかし他でもない、まさにそういう君を目当てにしてこそわたしは来て、テーン・ブシュケーン・ムー・ティセーミ』。

上掲MMJ28「わたしの主、わたしの神よ」には、「わたしは知らなかった」が根底にあり、その故にこそ何ものをも打ち砕き圧倒する恐怖と喜びと感謝のアマルガムが爆発する。「目撃した者 *ὁ μαρτυρῶν*」のその「目」は見据えていたが、トマス自身はその罪が自分のことであるとは、サムエル下 12 章のダビデと同様、「知らなかった」。そしてその罪が紛れもなく客観的に逃れ得ない事実であることを生々しく知らしめた上で、その場で直ちに、これほどの大罪を丸ごと赦す愛。これがイエスにおける愛だということ、トマスも周りのわれわれも「知らなかった」! MM では 128 はこうしてイエス運動の始元の喜び 120 に直結し、そこへと還帰する。

復活を疑った罪に留まらず、この疑惑がその残響にしか過ぎないところの、神を刺し貫いたという信じ難い大罪。これを想起させられた、そして同時に赦された——まさにこのことを知らしめられた驚きと喜びの爆発こそが、トマスの「わたしの主、わたしの神よ」の号泣に突き上げた当のものであり、ヨハネ「福音書」の本体部のフィナーレを構成するものであったのである!

上掲ゼカリヤの、「彼らは自らが刺し貫いたその神を見る」という結構の、身の毛もよだつ罪の暗黒を示す聖句の後には、暗黒の日から救いの日への転換が語られていた(ゼカリヤ 14.6-9)。

その日には、光がなく、冷えて、凍てつくばかりである。

しかし、ただひとつの日が来る。その日は、主にのみ知られている。そのときは昼もなければ、夜もなく、夕べになっても光がある。

その日、エルサレムから命の水が湧き出で、半分は東の海へ、半分は西の海へ向かい、夏も冬も流れ続ける。

主は地上をすべて治める王となられる。その日には、主は唯一の主となられ、その御名は唯一の御名となる。

ここを予表とするイエスの業においては、次のようになっていく——彼らは「その日に」、「自らが刺し貫いた神」から「命の水が湧き出る」を見る。命の水の湧出とはつまり、救いの愛の噴出だったのである。

あの「知らなかった」の直中での悪いと恐怖の極限状況を迎えた共同体の苦悩が、ヨハネ共同体の「エマオの危機」であったと考えられる。それは一度克服されればあとは常に喜びと感謝だけの世界が存続する、ということではないであろう。廻りのイエスがおられる、ということ語り明かすランガーシュの進行は、ヨハネテキストにおいて必然的不可避的に、イエスの不在を語る相面に突

入せざるをえない、のであった。Keigenes Wortのこの位相においては、信の在を語ろうとするとき言葉は信の不在を表す方向へと滑らざるをえない。「エマオの危機」はイエス運動が獲得した現在終末論がなす信の円環の、その中心環であるはずである。

243 「イエス不在」と「わき腹の穴」

<イエスのわき腹の穴>という表現には、また同時に、ヨハネ共同体のイエス喪失感情そのものが関係しているに違いない。現在終末論は断片的に突き上げる痛切なイエス喪失感の産物強めこそすれ、決して弱めることはないであろう(『われそれに値せず』)。<イエスのわき腹の穴>。ひとはこの表現を前にして、無意識のうちに、自分の中核にぽっかり口が開いている姿を見てしまう。「そう言って、手とわき腹とお見せになった」という語りを受けて、受信者はまじまじとその「穴」を見据える。そこから目を離すことが全く困難である。困難であることの原因の一半は、受信者が見るこの「穴」が受信者自身のわき腹の穴、ただし「目撃した者ὁ βραρακάς」のその「目」の視角から見据えられた「穴」でもあるのだからに違いない。

244 「わき腹 πλευρά」 と 「内/穴 κοιλία」

19章での、イエスの「わき腹」から「血と水」が流れ出るということは、水の祭り仮庵祭の最終日、イエスの説教に予告されていたのだった。
OO

¹⁷ そして終わりの日に、祭りの大いなる [日に] ’Εν δὲ τῇ ἑσχατῇ ἡμέρᾳ τῇ μεγάλῃ τῆς βορῆς,
イエスは立ち上がって叫ばれた、言われるには。
「満いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。
⁷ わたしを信じる者は、
聖書が言ったとおり、
彼の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。」
⁷ ³⁹ イエスは言われたのである、
受けようとしている “霊” について、
イエスを信じる人々が。
イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、
“霊” がまだ降っていなかったからである。

ὁ πιστεύων εἰς ἐμέ,
καθὼς εἶπεν ἡ γραφή,
ποταμοὶ ἐκ τῆς κοιλίας αὐτοῦ βέουσιν ὕδατος ζωῆς,
τοῦτο δὲ εἶπεν
περὶ τοῦ πνεύματος ὃ ἐμελλον λαμβάνειν
οἱ πιστεύσαντες εἰς αὐτόν

ここには驚くべき強力なレトリックが三種展開されている。類像性、われわれが「借景語法」、「二股用法」と呼ぶところのもの。シニフィアン「終わりの日に」は「祭りの終わり」と「終末論的終わりとの二股に使用されている。ここは裏面で、「終末論的終末が強烈な切迫感のうちに語り始められていることが重要である。確かに上掲引用部分の外枠の「終わりの日に」、「栄光」、「霊の降下」によって「終末」が浮き上がらされてはいる。しかし実は「アナステーソー・アウト[ン]・[エン]・テー・エスカター・ヘーメラーわたしは復活させる、その人を、終わりの日に」というイエスの言葉がこの定型のまま、直前6章に連続して4回も反復されていた(6,39.40.44.54)。しかもそれは終わりに向かっての約束として必ず文の終わりに出現していた。そういう中でいきなり段落の最初から「エン・ア・テー・エスカター・ヘーメラー そして終わりの日に」と語り出された。受信者はギリシとしてしまう。「目と耳に覚えのあるこのシニフィアンの連なりに沿って、受信者の目と耳と意識が滑り始めると、その瞬間に思ってしまう、『約束された終末が開始したのか!』とよく聞けばそれは「祭りの終わりの日に、という意味だった!次にこの「祭り」が作用し始める)。

『約束された終末!』という緊張を惹き立てた受信者はイエスの水の説教を聞く。一年で最大の歓喜が弾け飛ぶ「水の祭り仮庵祭」の中で、民衆の興奮が最高潮に達した場面をフレームとし、それを借景として、「生きた水」の噴出を告げる喜ばしい説教が語り出される。祭りに酔う民衆の驚喜乱舞はイエスの説教から生じたかのようなものである。そして祭りで爆発している民衆の歓喜が説教の借景とされたのは、この歓喜を、イエスの愛の行爲が終末においてもたらす歓喜の予表と感じさせるため(二股!)なのである!

さて上記引用部分の上下にあるイエスに信じる者たちという明瞭な枠組みとその内部を見られたい。イエスに信じる者たちの輪の中から「生きた水」の流れ出ている様が、そのまま目に見える類像性の姿において喜ばしく語られている。そればかりではない。ここでは「わき腹、プレウラ」に相当する語は「内、コイリア」となっていて、この語彙は「腹、腸、食道、胎、心」、要するにその原義は<穴>である。いまやわれわれは、弟子たちの輪の中から、と同時にイエスの、そしてイエスに信ずる者たちの「腹」から、生きた水が出る様の類像性として上のテキストを「見る」のでなければならない。テキストのこの意図に従うべくわれわれは、7,37の位置を身体の肋骨部として左寄せに、その下部7,38-39を腹部の「穴」として右寄せに記入した。この「身体の穴」の位置からの「聖霊」の祭出が予告されているのである。ということはつまり予告実現場面の20章のあの箇所でもまた、人間の「腹」から、そして弟子たちの輪の中から「聖霊」が出たことが類像的に告げられていることになる。そのことを反映すべくわれわれは、MM左枠のニカ所を(そしてNNも)類像的に記載した。MM J19-20、J26、NN19,32-33は身体の肋骨部、その下部に右寄せに窪んでいる J21-23、J27-29、NN19,34は穴としての腹部である。J21-23では腹部から「聖霊」が発出しているものであり、J27-29では胎内で子が生まれ出ようとしているのである。「イエスの胸もとに寄りかかった愛弟子」(13,23-25)の構図は鮮烈に上の類像性を表現するものである。

「穴からの水」というテーマ語がテキストを貫いて配置されていること、しかもこの穴が明確に弟子たちの輪の中、身体の穴(腹部)として「目に見える」類像性を意識して叙述されていること。ソシュールのアナグラム研究、クリステヴァのバラグラマチスムの重要性に注目する者には、強烈で深い身体感覚の中に「愛の水の噴出」を感じ取らせようとする如上の事実、驚嘆の他はない。

2A5 ヨハネ共同体の見る幻

4章の次の箇所は、「ヤコブの井戸」の傍らでイエスは旅の疲れを癒やそうとされていたことを語り、——ご自分の「内」から命の水を与え、それを受けた人々はまたその「内」から命の水を与えるようにと——イエスが地上に降り立たれたのが「天の門」を通過してであったことを事後的に示すものであろう（狭義には4章末、広義には10章末でイエスは「天の門」を通過して帰られる）。むしろヨハネ共同体の見る幻はこうであろうか。

「天の門」と「ヤコブの井戸」をひとつのものとみた天の開け（「穴」）から、ヤコブの階段を伝って愛と生命の水が流れ下るという幻

しかしそれは、十字架上のイエスのわき腹の穴からわれわれの上に降り注がれている「血と水」の予表なのである。「ヤコブの井戸」と「空虚な墓」が「それを塞ぐ石が、わきに転がされること」で接続されているのに気付けば、胸の張り裂ける喜びが湧き上がる。じつに4章冒頭サマリアの女の物語は20章冒頭のマグダラのマリアの物語と接続されているのである。二人は「穴＝空虚＝深淵からの人」の到来を共同体に告げる役割の女性である。

（サマリアの女の物語と10章ベタニアのマリアの物語との屈曲した接続については拙論『エイドー』を参照されたい）。

下記PPは上來われわれが考察してきた全てを予告するものであろう（Vgl. Gen. 28,10-29,14）。

PP

- *4しかし、サマリアを通らねばならなかった。
- *5それで、ヤコブがその子ヨセフに与えた土地の近くにある、シカルというサマリアの町に来られる。
- *6そこにはヤコブの井戸があった。
- イエスは旅に疲れて、そのまま井戸のそばに座っておられた。
- 正午ごろのことである。
- *7サマリアの女が水をくみに来る。

イエスは彼女に言う、「飲ませてください。」

*8弟子たちは食べ物を買うために町に行っていたからである。

*9すると、サマリアの女は言う、
「どうして、あなたはユダヤ人なのに、
わたしに飲ませてほしいと頼むのですか
わたしはサマリアの女ですのに。」

ユダヤ人はサマリア人とは交際しないからである。

*10イエスは答えて言われた。
「もしあなたが、知っているならば
神の賜物を、また、『飲ませてください』と言ったのがだれであるかを、
あなたの方からその人に頼み、
その人は与えたことであらう、あなたに生きた水を。」

*11女は言う。
「主よ、あなたはくむ物をお持ちでないし、井戸は深いのです。
どこからその生きた水を手にお入れになるのですか。」

*12あなたは、わたしたちの父ヤコブよりも偉いのですか。
ヤコブがこの井戸をわたしたちに与え、
彼自身も、その子供や家畜も、この井戸から水を飲んだのです。」

*13イエスは答えて言われた。
「この水を飲む者はだれでも 　　また渇く。」

*14しかし、わたしが与える水を飲む者は 　　決して渇かない。
むしろわたしがその人に与える水はその人の内で泉となろう、
湧き出る水の、永遠の命に至るようにと。」

ἀπεκρίθη Ἰησοῦς καὶ εἶπεν αὐτῇ,
Πᾶς ὁ πίπνων ἐκ τοῦ ὕδατος τούτου
ὅς ὄν πηρὴ ἐκ τοῦ ὕδατος οὐ ἐγὼ δώσω αὐτῷ,
ἀλλὰ τὸ ὕδωρ ὃ δώσω αὐτῷ γενήσεται ἐν αὐτῷ πηρὴ
ὑδατος ἀλλομένου εἰς ζωὴν αἰώνιου.

διψήσει πάλιν
οὐ μὴ διψήσει εἰς τὸν αἰῶνα,

予表とイエスにおける業との対比

*30そこで、彼らは言った。「それでは、わたしたちが見てあなたを信じることができるように、どんなしるしを行ってくださいますか。どのようなことをしてくださいますか。」
*31わたしたちの先祖は、荒れ野でマンナを食べました。

*47はっきり言っておく。信じる者は永遠の命を得ている。
*48わたしは命のパンである。
*49あなたたちの先祖は荒れ野でマンナを食べたが、死んでしまった。
*50しかし、これは、天から降って来たパンであり、これを食べる者は死なない。

なおテキスト上、OOおよびPPのすぐあとにわれわれが注目している術語ἀλλεωをめぐり記述がある。術語ἀλλεωは、「イエスのわき腹の穴」

から噴出する愛が、言葉の位相において捉えられたもの、以外ではありえないであろう。

関連拙論

佐々木寛治：『メタファー過程に寄せて』

川崎医学会誌一般教養篇第20号 1994 (=過程)

——『十字架上のメタファー』

川崎医学会誌一般教養篇第20号 1994 (=十字架上)

——『「わたしを見たから信じるのか」——ヨハネ「福音書」における交錯配列法の光の下でのθεραπειν』

中国短期大学紀要 第28号 1997 (=セオーレイン)

—— Zur Exegese über Joh. 8,52-53 (eine Resümee) —— unter dem Licht des Chiasmus und der Architektonik im Johannes-, Evangelium "

Kawasaki Igakkai Shi Liberal Arts & Science Course No 23 1997 (=Joh. 8,52-53)

——『イエスのエイドーとマリアのエイドー——ヨハネ「福音書」11章28-37節の提示語分析』	中国短期大学紀要 第29号 1998	(=エイドー)
——『ヨハネ「福音書」9-10章の構成——ヨハネ「福音書」9-10章における術語λαλέω [I-1]——』	川崎医学会誌一般教養篇第24号 1998	(=構成)
——『分割する言葉——ヨハネ「福音書」9-10章における術語λαλέω [I-2]——』	川崎医学会誌一般教養篇第24号 1998	(=分割)
——『羊たちは彼の声を聞く——ヨハネ「福音書」9-10章における術語λαλέω [I-3]——』	川崎医学会誌一般教養篇第24号 1998	(=聞く)
——『フォース カイ ホース 光を恵まれた者における言葉の生成——ヨハネ「福音書」9-10章における術語λαλέω [II]——』	川崎医学会誌一般教養篇第24号 投稿希望論文発表会口頭発表・原稿提出断念 1998	(=フォース)
——『ある奇跡物語の転倒 ——ヨハネ「福音書」9-10章における術語ラレイン [III-1] —— 』	中国短期大学 紀要 第30号 1999	(=転倒)
——『テキスト重層性についてのレジュメ "Doubling"-Topic-Isotopie ——新しいテキスト記号論 = Semegesis に向けて——』	日本新約聖書学会第39回大会口頭発表付属論文 1999	(=重層)
——『悪魔のλαλέωとイエスのλαλέω——ヨハネ「福音書」9-10章における術語λαλέω [III-2a]——』	川崎医学会誌一般教養篇第25号 1999	(=悪魔)
——『二つの時代の法廷物語をつなぐもの ——「神の法廷」顕現物語成立に対する申命記18,20-22の奇跡——ヨハネ「福音書」9-10章における術語λαλέω [III-2b]——』	川崎医学会誌一般教養篇第25号 1999	(=法廷)

¹ Unbeständige Rede とは、自己を維持し得ず、常に死へと滑り落ちていくディスクール、語れば即ち死、となるディスクールであり、悲劇『コロノスのオイディプス』を典型とする。Unendliche Rede とは「現在と不在の絶えざる交替」、スピノザからヘーゲルに伝わった「無限性」概念を参照し、かつ、精神分析運動の「現在と不在の交替」への深い注目に共感しつつわれわれは命名した。この二つのディスクールは広義の詩的言語に属し、Keigenes Wort である。この両者の、ヘラクレイトスにどこか似た、打てば響く緊密な抽象的思索的構成の奥深さと、中間の Bildrede の物語風の、具象的現場性の豊饒さは全く異質である。Bildrede とはたとえ物語の一種であり、E・シュバイツァー氏が10,1-6は Bildrede であると指摘されているのをわれわれはそのまま継承するのである。10,1-6 と 10,16 は同一なランゲージュである。

なお、死と運命を語り出しそこに意味生産活動（シニフィアンス）が湧出するという、そのような場所が問題となる時、ソボクレスのランゲージュとヨハネテキストのそれとの、目と耳を疑わせるほどの類縁性への着目は豊かな果実を約束しているように思われる。ヨハネ「福音書」の「それでは人の子がもたらしたところの上ののを見るならば…」(6,62)と、「あなたたちは、人の子を上げたときにはじめて…わたしが…話していることが分かるだろう」(8,28)と、『コロノスのオイディプス』の対イスメネ対話（特に383-395）、対テセウス対話（特に551-582）とを対照することが是非とも必要である。それぞれその一部を若波文庫版高津訳で掲げておこう

イスメネ お父さまには、彼らの力を左右なせることが、おできになるとのことでございます
 オイディプス おれがもう役に立たぬ者となった時に、おれは男となったのか。

テセウス いつの時にあなたの言われる恵みは明らかにされるのか。
 オイディプス おれが世を去り、あなたがおれを葬ってくれる時

² サムエル上の「ハンナの祈り」(2,1-11)は一方の極から他方の極への移行を多く語っていて、Verändernde Rede の側面を窺うには好便である。特に2,6には、イエスの捨身と、それと一体となつたいのちの再受領というテーマに呼应するものが語られていて参考になる。われわれには、むしろこの書の第一章で、「われに男児を与えたまえ」とのハンナの命がけの痛切な祈りが、日常言語を食い破った向こうで、新しい意味生産（シニフィアンス）のコーラーから発せられるランゲージュとして立ち昇っていく様こそが、限らない関心を惹く。彼女の祈りは自分自身にとっての意味sensは持ちながらも、傍らの祭司には意味作用（シニフィカシオン）を持ちえないままに、神の方向sensを指して熱く昂揚していくのである。ヨハネ「福音書」9章では、生まれながらに目のみえない人物が、新しい生命の中に生み出されることによって目を開かれるや直ちに、彼はイエスを証する者として（implicitに）いのちを奪われるのであった。丁度それと軌を一にするように、ハンナの祈りは、一方で神から生命を与えられることを切望すると共に他方で、直ちにこの生命を差し出すことを誓うのである。無限性の円環をなすハンナの祈りは2章で新しい言語空間を張るに至った。2,8の「大地のもろもろの柱は主のもの、主は世界をそれらの上に据えられた」という賛美は、まさにこの 言語空間を確立するもろもろの柱の樹立を慶ぶものであろう。人間の語りがありかたによって、これらの柱は瞬時に破砕され、この空間はクラッシュしうるのである。Unendliche Rede は Endlose Rede ではない。後者はたんなる無限際なりとめもない締まりのない語り過ぎない（これがある確固としたランゲージュの表出である可能性をもちうることは否定しない）。前者は一方の極の反対極への転換の交替、同時に反対極を包摂する交替（螺旋状的に進行するしないにかかわらず）の持続である。ヘラクレイトスの思索をハイデッカーは大文字のロゴスとするが、われわれは大文字のロゴス（ロゴスと表記しよう）は人の子イエスとその道、およびその言葉の生命のために担保しておく。分節的「論理」とそれを支える主体の秩序を壊乱してなおく意味ある必然的過程は、挙げて「バトスの必然性」と呼ぶことにする。

³ 今やわれわれは、下記引用箇所「分かるだろう」とイエスが言われた二つの事項は、根源となるイエスの言葉『テーン・ブシェケン・ムー・ティセーミ』を指し示し、これによって二つがひとつのものとしてとりまどめられるのだ、ということを理解する。まことにイエスの逆行言語λαλέωとは、ご自分の存在と虚無とを同時に示現する、消えつつ鳴り渡る愛の<音>なのであった。

⁸²¹ ここで、イエスはまた言われたεἶπεν。「わたしは去って行く。あなたたちはわたしを捜すだろう。だが、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる。わたしの行く所に、あなたたちは来ることができない。」⁸²⁴だから、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる、わたしは言ったεἶπονのである。『わたしはある』ということを感じないならば、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる。」⁸²⁸ここで、イエスは

言われたἐίπεν。「あなたたちは、人の子を上げたときに初めて、『わたしはある ἐγὼ εἰμι』ということ、また、わたしが、自分勝手には何もせず、ただ、父に教えられたとおりにこれらのことを語っている ἐλάλῃ κατὰς τὸ εἶδάμεν με β πατῆρ ἡμῶν Ἰησοῦ」ことが分かるだろう。

⁴ こうして上記「羊を招き入れる門として来た」という言葉の「来たエールソン」(ἐρχομαιのアオリスト)は、ルカ21,27の「そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗ってくるのを、人々を見るβνουνται」の「来るἐρχομαιの現在分詞」がすでに成就しているものとみなされていると考えられる。テキストのこの箇所は、そのメンタルスペースを、実にこのようなく成就の時>である今に据えているのである。CC3「わたしより前にきた者は皆」はこうして、鮮明に位置づけられる。

⁵ フロイトの場合は、兄弟達が父殺しを遂行し、その責めの意識(象徴的去勢)の共同性が秩序を形成する。このフロイトの論理とわれわれの「イエス捨身を根底にし、これに応ずる愛と感謝の共同性」との奇妙な対応に、われわれの道の前進への鍵が横たわっていることを期待したい。想像界の双数的=決定的な、死を賭しての闘いは、去勢する父の禁圧によってのみ秩序にもたらされるだけではない。破滅に向かうあの無政府の闘いは、上からの愛の降下へと応える愛と感謝による調和にもたらされることがあるのだということ。このことを示していく道を、われわれはクリステヴァを参照しつつ求めているが、「差異性」ひとつとっても何の議論をもまだ展開し得ていない。道ははるかに遠いし、根底からの考え直しを何度も繰り返さなければならないことと思う。ご指導を心から希う。ともあれ、われわれがヨハネ「福音書」によって強く督促され強制されて、準備も力もなく無謀にも「愛の言語の始元論」を課題にしているのは、まさにそこに「共同体のモラル形成論」が重なり合うからでもあるからなのだ、と言おう。

⁶ LLの交錯配列と重ねて次の交錯配列に注目することがヨハネ「福音書」との関係(現在終末論形成の相互作用論の観点から)考察する上で重要であろう。ルカによる鮮烈な交錯配列が提示されたとき、この全体を見渡すメンタルスペースが与えられる。それはヨハネ神学の「全時性」と現在終末論の確立に、何らかの寄与をなしているはずである。

ルカ福音書24,13-53 交錯配列

A 13-14 エルサレムからエマオへの弟子たちの歩みと語り合い

B 15 イエス、彼らに近づいて来られる

C 18-19 エルサレムの事件の語り聞かせ

D 20-24 受難と復活のテーマ

E 25-27 モーセと預言者による「必ずダイ」の予告

F 30 パンを食べる

G 32 心が燃えていた

H 35 パンをさいてくださったときにイエスだとわかった

I 36-38 イエス御自身が彼らの真ん中に立ち

「あなた方に平和があるように」と言われた。

H' 39-40 イエスは手と足をお見せになった

G' 41a 喜びのあまり

F' 41b-42 魚を食べる

E' 44 モーセと預言者による「必ずダイ」の予告

D' 45-46 受難と復活のテーマ

C' 47-48 エルサレムから初めて、これらの証人になれとの言葉

B' 51 イエス、彼らを離れられる。

A' 52-53 ベタニアからエルサレムへの弟子たちの帰還と神賛美

⁷ 本文言及箇所はジル・フォコニエ著/坂原他訳『新版 メンタル・スペース』白水社、「1章語用論的関数とイメージ1.6単純な曖昧性1.6.1時間スペース。認知言語学のメタファー理論をも包摂する生産力豊かなメンタルスペース理論はヨハネテキストの「かの時と同時代との二重性」を言語学的に説明しうるすぐれた理論である。ヨハネテキストの時間論的分析に多大の貢献をなすものだとわれわれは期待しつつ、これの検討を続けている。本文下段記述の「親スペースR」をわれわれは、「発信者受信者の既知の共通フレーム」としての現実Rと見立てる。「廻りのイエスの傍らで語りつつあることを意識する語り手」(例えばヨハネの手紙一、冒頭の語り手)の「親スペースR」を推論する道筋さえも与えられているように、われわれには思われる。

⁸ a-b-a'の典型的なヒラリテート(イエスの死が語り出されるとき、ヨハネテキストが迎える律動)。イエス逮捕場面に登場しているこの鮮烈な言語形式はここが特別な意味産出の現場であることを示している。この言語形式はここが「イエスの死」のテーマをめぐるものであるにしても特に、死へと向かわれるイエスの前で「彼らが(つまりユダが)ひれ伏した、ピトーした」という、生命の真実を特有な律動のうちに語るものである。われわれはユダのこのピトーに、「イエスの十字架後」の「ユダの慟哭」を読む。ヨハネテキストはルカ5,8における、鶏鳴に接した「ペテロの慟哭」を受け止め、これを「ユダの慟哭」にまで深化したに違いない。ヨハネ神学の「愛」は「ユダの慟哭」(=「エマオの危機」)の上に注がれているとわれわれは考えるからである。われわれは加藤常昭氏の「ヨハネ福音書講解説教」1992.2.2~1995.8.6を、まさにユダの涙越しにヨハネを読む>説教として学んできた。氏のユダ言及に圧倒され続けてきた。本小論のヨハネテキスト解釈は、重層する意識各部にそれぞれ響く氏の説教の掌上での、浅薄狭小なバラフリーズでしかない。依拠するところ多方面にわたることに感謝し、理解の至らないことへのご海容とご指導を心から願ひ上げる。

⁹ 目撃した者ὁ βαρσακῶςという名の完了時制に注目すれば、それは、全体を既にその根基から知っている、共同体の<良心>Ge-Wissen、共同体の自己意識das das-Selbst-bewußte Seinである。それは一人ひとりのトマス、一人ひとりのユダに対する他者Autre(ラカン)でもあろう。目撃した者ὁ βαρσακῶςのその目には、「彼らが」神を刺し貫き(自分の刺し貫いた記憶は救済のパロールによって抑圧され、何の想起もなく他人事のようにして)その神を見ている、その全体が丸見えなのである。しかし目撃した者ὁ βαρσακῶςのその目とは、われわれには、見るように迫る「イエスのわき腹の穴」の語りそのものようにも思えるのである。

いずれにせよ早晚、フロイト、クライン、ラカンの研究の上にヨハネテキストが豊かな光を投げかける時代が到来するに違いない。